

大阪府

事務局 〒577 大阪府東大阪市御厨栄町4-1-10 大阪商業大学体育研究室内
版上 勝美 TEL 06-781-0381

〈沿革〉

協会創立以前と経緯

豊中高等学校に奉職していた馬場太郎先生が学校当局および関係者に部の創設を強く要請され続けた結果、柔道部の中に併設された。本府において初めてのウエイトリフティング部が、ここに誕生した。そして、昭和27年に大阪ウエイトリフティング協会が発足したのである。同年、現在の(社)日本ウエイトリフティング協会、ならびに(財)大阪体育協会にも加盟すると同時に、高校部会も全国高等学校体育連盟に加盟した。ここに、大阪府高体連ウエイトリフティング専門部会が創設された。

このことは、故馬場先生と田中繁之先生の並々ならぬ御尽力の賜ものであるといえる。

昭和28年に新築なった大阪府立体育会館で全日本選手権大会と銘打って全国大会を開催。昭和29年には徳島県で開催された、第1回全国高等学校ウエイトリフティング競技選手権大会に、大阪高等学校代表として、豊中高校チームが出場し活躍をしている。

これらの事から言えることは、福島県・栃木県・東京都・徳島県・岡山県・愛媛県の各県と共に、大阪ウエイトリフティング協会は良いスタートを切り、バイオニアとしての歴史と伝統を持ち得たと言える。協会創立から短い時間の中で協会組織機能が良い形で発揮された結果である。

第2回全国高等学校選手権大会(昭和30年度)においても、B級富田富一(岸和田高校)がT230kgで3位入賞し、M級吉本忠洋(豊中高校)が172.5kgで2位、そしてLH級福島啓介(豊中高校)が155kgで優勝を果たしている。

昭和32年の第12回国体において、豊中高校の森選手がFe級S種目において日本タイ記録を出している。

当時の国体は、現代のように「少年

の部」と「成年の部」とに分別されておらず、一般代表選手の中で好記録を出した事は、大阪協会にとって画期的な事であり、大阪協会の関係者の多くにも良い刺激と影響を与えた。当時の大阪協会の競技力向上と普及に大きな貢献をなしたといえる。

この事は、この競技の普及発展に最大の努力を尽くされた故・馬場太郎ならびに田中繁之の熱意の賜ものである。

第22回国民体育大会において、F級・一般の部で阪上勝美(大商大教員)が6位、Fe級で高尾忠和(法大)が3位に入賞を果たした。

この事は、幾多の困難な条件を克服しながら競技力強化と普及に最善の努力を発揮してきた結果であると言える。この年に第22回大阪高等学校総合体育大会が開催され、各種のウエイトリフティング競技選手権大会が開催されるようになった。各大会が充実していく事によって、より大阪の競技力向上と普及活動を喚起する事につながった。このような状況の中で高等学校の普及も一段と加速された。

高体連ウエイトリフティング部会のメンバー校を見てみると下記の13校に増加してきている。

豊中高校、大阪産業大学高校、桃山学院高校、大工大高校、大鉄高校、商大附高、清風高校、校方高校、都島工高、東住吉高校、福島商高、高槻高校、此花商高

今後の発展が益々期待できる状況に現在あると言える。この雰囲気の中で、この年に韓国で開催された第3回日韓親善大会に於て、高尾忠和(法大)がS種目において特別試技(4回目)で117.5kgのジュニア世界新記録に挑み成功したが、体重オーバーで公認されなかったのは、返すがえすも残念な事であった。J種目においても144kgのジュニア世界記録に挑戦したが、惜しくも失敗。しかし、その意気や良しである。

昭和38年10月に開催された国際スポ

歴代会長

- 初代 加藤 清三 (昭和27年～)
- 第2代 中村 広三 (昭和43年～)
- 第3代 馬場 太郎 (昭和50年～)
- 第4代 荻原 稔 (昭和59年～)
- 第5代 舟戸 良裕 (平成5年～)

ーツ大会兼第23回全日本ウエイトリフティング競技大会B級で阪上勝美(大商大教員)がT310kgで優勝。

第5回全日本学生新人選手権大会B級でT262.5kgで3位に入賞。

第8回全日本学生個人選手権大会において、F級で初優勝し、J種目112.5kgの日本新記録を樹立している。東高西低の学生スポーツ界で関西各大学に大きな刺激を与え、各チームも活発化し、木下(関大)等も競技力を高め、関西の各大学も充実期を迎え始めてきた。

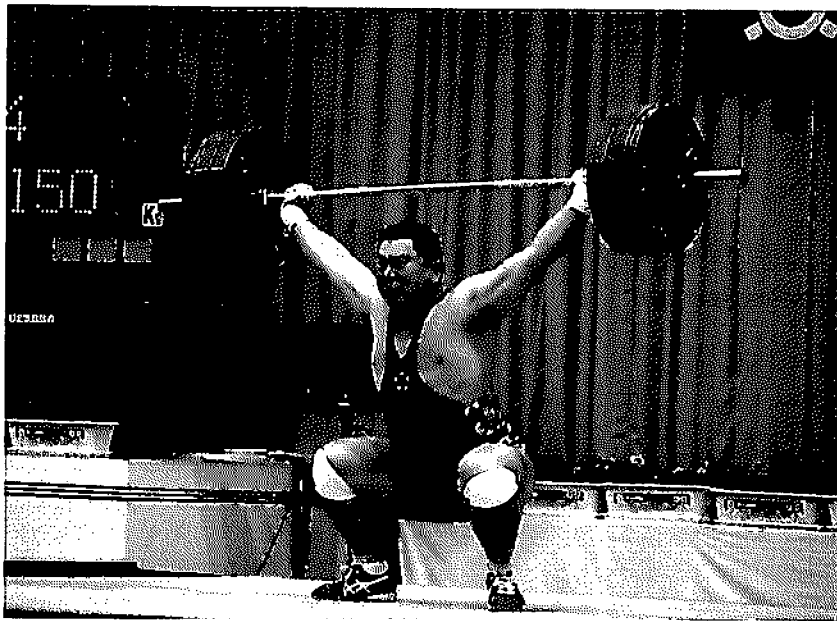
〔各競技大会・成績一覧〕

全日本選手権大会・優勝者

第23回	52kg級	阪上勝美
	100kg級	川名英一
第24回	100kg級	川名英一
第25回	100kg級	川名英一
第31回	75kg級	中尾美喜夫
	100kg級	岩崎雄二
第40回(船橋)		
	52kg級	宮下日出海
第42回(上尾)		
	110kg級	大川克弘
第43回(上尾)		
	110kg級	大川克弘
第44回(上尾)		
	110kg級	大川克弘
第45回(上尾)		
	110kg級	大川克弘(4連勝)
第49回		
	+110kg級	大川克弘 初優勝
第50回	110kg級	大川克弘
第51回	110kg級	大川克弘(2連勝)
第54回	+108kg級	大川克弘
	83kg級	森川大輔

国民体育大会・優勝者(成年の部)

第15回	川名英一	100kg級350kg
第19回	川名英一	100kg級400kg
第20回	藤本秀喜	82.5kg級415kg
第27回	屋根下修	52kg級320kg
第27回	中尾美喜夫	75kg級417.5kg
第34回	大川克弘	110kg級317.5kg
第35回	大川克弘	110kg級310kg



全日本選手権で8回優勝した大川克弘

- 第36回 大川克弘 110kg級330kg
- 第37回 大川克弘 110kg級320kg
- 第38回 大川克弘 110kg級345kg
- 第41回 大川克弘 110kg級340kg
- 第42回 大川克弘 110kg級340kg

※大川選手、110kg級、5連勝。

(34回～38回・大会)

(41回～42回・大会)

合計 7回優勝。

但し、上記のT記録は優勝回数である。43回以降は(S)・(J)は別記録となる。

全日本社会人選手権大会歴代優勝者

- 第1回大会 100kg級 川名英一367.5kg
- 第2回大会 56kg級 阪上勝美317.5kg
- 第2回大会 100kg級 川名英一390kg
- 第3回大会 52kg級 阪上勝美290kg
- 第3回大会 100kg級 川名英一355kg
- 第9回大会 75kg級 中尾美喜夫415kg
- 第16回大会 110kg級 大川克弘315kg
- 第17回大会 110kg級 大川克弘325kg
- 第18回大会 110kg級 大川克弘337.5kg
- 第20回大会 110kg級 大川克弘352.5kg
- 第23回大会 110kg級 大川克弘340kg
- 第26回大会 +110kg級 大川克弘327.5kg
- 第29回大会 +110kg級 大川克弘

全日本実業団選手権歴代優勝者

- 第2回大会 52kg級 信野守彦190.0kg
- 第16回大会 75kg級 知念秀樹260kg
- 第17回大会67.5kg級 知念英樹252.5kg
- 第17回大会67.5kg級 知念秀樹252.5kg
- 第19回大会 60kg級 森下良平260.0kg
- 第19回大会67.5kg級 知念秀樹260kg
- 第20回大会 60kg級 森下良平255kg
- 第20回大会 75kg級 知念秀樹275kg
- 第22回大会 59kg級 森下良平240kg
- 第22回大会 76kg級 知念秀樹282.5kg

国民体育大会・優勝者(少年の部)

- 第20回 山根正俊 52.0kg級 260kg
- 第20回 高尾忠和 56.0kg級 297.5kg
- 第21回 高尾忠和 56kg級 310kg
- 第21回 岩崎雄二 82.5kg級 330.0kg
- 第24回 横川勝光 52.0kg級 277.5kg
- 第24回 木村恵則 82.5kg級 337.5kg
- 第33回 市場孝士 56kg級 220kg
- 第34回 高尾和志 75kg級 255.0kg
- 第37回 西山浩司 75kg級 267.5kg
- 第38回 花城正樹 56kg級 217.5kg
- 第38回 知念英樹 67.5kg級 250.0kg
- 第41回 市川 剛 75kg級 255.0kg
- 第42回 追抱和晃 56kg級 215.0kg
- 第46回 安井 盾 82.5kg級 120.0kg
- 第46回 安井 盾 82.5kg級 150.0kg
- 第47回 上野栄介 82.5kg級 120.0kg
- 第47回 上野栄介 82.5kg級 142.5kg

- 第46回 森岡和雄 90kg級 145.0kg

国民体育大会総合成績一覧表

- 第12回 8位 静岡、清水市
- 第14回 8位 東京、東京
- 第18回 8位 山口、下関市
- 第21回 6位 大分、湯布院町
- 第24回 6位 長崎、松浦市
- 第27回 2位 鹿児島、垂水市
- 第34回 4位 宮崎、新富町
- 第38回 2位 群馬、水上町
- 第41回 5位 山梨、御坂町

全国高等学校選手権大会・成績一覧表

- 第25回 大阪工業大学高校 優勝
- 第26回 大阪工業大学高校 優勝
- 第28回 大阪工業大学高校 3位
- 第29回 大阪工業大学高校 3位
- 第30回 大阪工業大学高校 優勝
- 第38回 大阪工業大学高校 2位

歴代高校選手権者

(第1回より19回まで3種目)

(第20回より2種目)

- 第2回 福島啓介(大阪・豊中高) MF級 155.0kg
- 第13回 高尾忠和(大阪・清風高) Fe級 312.5kg
- 第13回 岩崎雄二(大阪・商大附) MF級 327.5kg
- 第20回 大川克弘(大阪・鉄道高) MF級 225.0kg
- 第25回 市場孝士(大阪・産大高) 56kg級 217.5kg
- 第29回 西山浩司(大阪・工大高) 75kg級 262.5kg
- 第30回 花城正樹(同)56kg級 207.5kg
- 第33回 市川 剛(同) 255.0kg
- 第38回 安井 盾(同) 260.0kg

五大都市体育大会



全国高校総体3回優勝の大阪工大高校選手団

団体の部

- 第40回大会 大阪市優勝
- 第42回大会 大阪市優勝
- 第43回大会 大阪市優勝
- 第45回大会 大阪市優勝

近畿社会人選手権大会

団体の部

- 第8回大会 第9回大会
- 第10回大会 第11回大会 (4勝)
- 第13回大会 第18回大会
- 第23回大会 第27回大会
- 第28回大会 第29回大会

個人の部

- 第16回 100kg級 大川克弘 327.5kg
- 第16回 110kg級 畑島邦盛 250kg
- 第17回 100kg級 安田幹雄 255kg
- " 110kg級 大川克弘 325kg
- 第18回 100kg級 安田幹雄 255kg
- " 110kg級 大川克弘 325kg
- 第19回 90kg級 河井俊範 260kg
- " 110kg級 大川克弘 320kg
- 第21回 110kg級 大川克弘 330kg
- 第23回 82.5kg級 横井経信 262.5kg
- 第24回 110kg級 大川克弘 330kg
- 第24回 75kg級 知念英樹 265kg
- 第25回 100kg級 丸山卓也 272.5kg
- 第26回 82.5kg級 大川克弘 340kg
- 第26回 82.5kg級 永松 誠 270kg
- 第27回 60kg級 森下良平 247.5kg
- 第27回 75kg級 知念英樹 267.5kg
- 第27回 90kg級 河井俊範 275kg
- 第29回 54kg級 田村宏樹 165kg
- 第29回 64kg級 森下良平 250kg
- 第29回 83kg級 横井経信 257.5kg
- 第29回 91kg級 永松 誠 275kg
- 第29回 99kg級 高木和宏 265kg
- 第30回 64kg級 森下良平 240kg
- 第30回 83kg級 森川大輔 270kg
- 第30回 99kg級 永松 誠 265kg
- 第31回 83kg級 松原 京 262.5kg

近畿社会人大会記録

- 64kg級 H 5 森下良平 (J)135kg
- " H 7 森下良平 (S)120kg
- 83kg級 H 6 森川大輔 (S)120kg
- H 6 森川大輔 (J)150kg
- H 6 森川大輔 (T)270kg

国際大会

※1985年、日中友好大会。於、大阪市中央体育館。期日・1985年6月16日。

※1988年、日中友好大会。期日・1988年11月3日。

関西学生選抜対中国。

- M級 早瀬 昇(大商大) 255kg

- LH級 馬 文広(中国) 300kg
 - MH級 楊 桂霖(中国) 315kg
 - H級 楊 懷慶(中国) 325kg
 - H級 大川克弘(大商大) 285kg
- 第8回、全国中学WL競技大会。期日・平成8年8月15日。会場・大阪府立体育館。
- 日・韓ユースWL競技選手権大会。期日・平成8年8月15日。会場・羽曳野市体育館。

昭和42年度

大阪高校新人選手権大会

- 於、都島工業高等学校
- F級 間沢良行(工芸高) 210kg
 - Fe級 氏丸重雄(福島商) 265kg
 - L級 森岡勝基(工大高) 270kg
 - M級 印藤 敏(福島商) 250kg
 - LH級 森本吉是(商大附) 237.5kg
 - MH級 木村恵則(鉄道高) 245kg

22回・大阪高等学校総合体育大会

- 於、大阪府立体育会館・別館
- F級 横川勝光(商大附) 162.5kg
 - B級 宮城 稔(清風高) 260kg
 - Fe級 守倉貞二(商大附) 257.5kg
 - L級 西浦通芳(清風高) 295kg
 - M級 三柄良夫(工大高) 300kg
 - LH級 倉本真琴(工大高) 320kg

第21回・大阪府民体育祭(成年)

- 於、大阪府立体育会館・別館
- F級 人見憲知(桃大) 260kg
 - B級 上田 勉(近大) 247.5kg
 - Fe級 田中正夫(法大) 315kg
 - L級 高山邦之(桃大) 290kg
 - M級 金子耕二(関大) 325kg
 - LH級 掛谷憲治(竜大) 365kg
 - MH級 森 優(森寅) 350kg
 - H級 小出新一(近大) 315kg

第21回・大阪府民体育祭大会(少年)

- F級 西沢純一(豊中高) 202.5kg
- B級 尾根下修(工大高) 250kg
- Fe級 氏丸重雄(福島商) 257.5kg
- L級 守倉貞二(商大附) 265kg
- M級 三柄良夫(工大高) 307.5kg
- MH級 田中長兵衛(工大高)297.5kg

指導者の在り方は、指導実績をもって強化及び普及策が考えられなければならない。これ等の事が十分に行われて初めて選手強化指導の内容充実が図られるものと考えられる。

指導者は常に選手の競技力向上の為に研鑽し、技術の追究、体力向上を追究していく事が肝要である。

いわゆる如何に選手を成長させるか、努力を継続していかなければならない。その為には、指導者・施設等の良し悪しではなく、いかに選手が有効にこれ等の条件を活用するかがポイントであると言える。それ故、選手達と接する時間が十分あり、学業や生活行動面の指導が十分できる事が指導者であると言えるであろう。

本府の場合、厳しい言い方になるが、この点において未だ十分であると言えない印象がある。普及面から言っても、十数校の高校チームが、現在は半数近くまで減少している。社会人登録者も現状は同じ状態にあると言える。そうして、もう一点は競技登録者数と競技役員登録者数かほぼ同数であるということである。協会のメンバーが今後やらなければならない事は、競技者人口の拡大ではないだろうか。競技人口が充実していく事によって、良い素材を発掘する事ができる。この努力を積み重ねていく事が肝要である。その為には、優秀で指導力と熱意のある指導スタッフを養成していく事が肝要である。

しかし、何と言っても強化の主人公は選手である。それ故、指導者は責任感と熱意をもって、コーチングに当たらなければならないだろう。

それと、指導者に与えられた課題は、指導者と選手は相互理解をし協調しあっていくことによって、指導者と選手の関係が良い形で実ることができる。

そして、選手は他の領域の人々からも理解され、支援・応援されていく事によって、さらに目的に向かって前進を続ける事ができるであろう。

〈現役員〉

- | | | | |
|------|-------|-------|--|
| 名誉会長 | 新堂 友衛 | | |
| 会長 | 舟戸 良裕 | | |
| 副会長 | 田中 繁之 | 山下 雅章 | |
| 理事長 | 阪上 勝美 | | |
| 副理事長 | 橋本 建郎 | | |
| 理事 | 鈴木 裕之 | 小野 嘉英 | |
| | 吉村 峻治 | 田中賢四郎 | |
| | 永谷 崑男 | 大川 晃尚 | |
| | 杉浦 勉 | 田島 俊信 | |
| | 金子 耕二 | 園田 清 | |
| | 高尾 忠和 | 宮下日出海 | |
| | 橋本 俊博 | 松浦 司 | |
| | 大川 克弘 | 知念 秀樹 | |
| | 植田 洋 | | |

兵庫県

事務局 〒673-040 兵庫県三木市別所町小林825-2 三木東高等学校内
佐野 隆 TEL 07948-5-8000

歴代会長

初代 白石 市郎 (昭和30年～)

第2代 鴻池 祥肇 (昭和61年～)

〈沿革〉

協会創立以前

わが国におけるウエイトリフティングの歴史は比較的新しいが、兵庫県は全国でも最も古い県の一つである。戦前の明治神宮体育大会の名選手であった故・鞍田健二が日体専(現・日本体育大)へ入学され、ウエイトリフティング競技を始めた昭和14年に起源を求めることができる。

鞍田は、昭和21年、兵役より復員し、明石高女(現・明石南高)へ教諭として着任し、明石市を中心に競技の普及に取り組んだ。

明石中(現・明石高)の生徒、板倉宏(神商大出)、八木勇蔵(現・県協会副会長)がその教えを受け、昭和24年4月、新制高校の発足と共に、両氏は明石南高へ移り、鞍田氏を顧問に活動を始めた。

また、尼崎市では、当時日本を代表する名選手であった故・丸井太郎、忠兄弟と第1回京都国体開催の功労者で尼崎市在住の谷本昌平氏らを中心に競技の普及に取り組んだ。特に丸井太郎は、建材店を経営するかたわら仕事場に練習場をかまえ、数名の同好者を集め、丸井クラブを結成。ウエイトリフティングの研究に全国を奔走した。

協会創立に至る経緯

昭和29年、第11回兵庫国民体育大会ウエイトリフティング競技の尼崎市誘致にともない、尼崎市協会を中心に県協会創立に奔走し、昭和30年4月、兵庫県ウエイトリフティング協会が発足し、初代会長に白石市郎、理事長に鞍田健二が就任した。

各種大会において数々の好成績を収めていた丸井太郎、忠の兄弟選手を中心に競技活動が行われ、昭和31年、第11回兵庫国民体育大会を見事に成功させた。

昭和32年、八木が明石南高へ帰り、

鞍田を中心に県高体連への加盟に努力しはじめた。

昭和34年、兵庫県高体連ウエイトリフティング部会を結成。翌昭和35年、正式に部会が承認された。

同年、第17回ローマ・オリンピック大会で三宅義信氏が銀メダルを獲得し、ウエイトリフティング競技が注目されだすと共に、高体連の加盟校も増加し、好選手が出はじめ、昭和40年以降、日本記録、日本高校記録、ジュニア世界記録等、数々の記録が樹立されるようになった。

昭和45年、第17回全国高校総体(和歌山)姫路東高家島分校優勝。同年、第25回岩手国体総合優勝。昭和62年、第25回全国高校総体(北海道)明石南高優勝。平成元年、第44回北海道国体総合優勝。平成4年、第39回全国高校総体(宮崎)舞子高優勝等、各種大会において毎年上位入賞を果たしている。また、個人では、藤代末男(武庫工高→明治大→尼崎市教委)が、昭和49年、第7回アジア競技大会(イラン)LH級金メダル獲得。また、昭和51年、第21回モントリオール・オリンピック大会ではLH級第7位に入賞した。昭和59年、小高正宏(明石北高→日本体育大→津名高教)が、第23回ロサンゼルス・オリンピック大会56kg級銅メダル獲得。平成2年、鶴谷賢司(尼崎東高→日本体育大)が、第11回アジア競技大会(北京)100kg級銅メダル獲得。平成6年、納富俊行(舞子高→日本体育大→県尼崎工高教)が、第12回アジア競技大会(広島)54kg級銅メダル獲得。また、佐野衛(明石南高→自衛隊体育学校)も+108kg級5位入賞等、世界的にも輝かしい成績を収めている。

〈年次別概況〉

昭和14年

鞍田健二が日体専(現・日本体育大)へ入学し、ウエイトリフティング競技を開始。

昭和21年

鞍田が明石高女(現・明石南高)へ教諭として着任。同氏は、第1回京都国体でFe級2位入賞。

昭和22年

第2回石川国体で丸井太郎がFe級優勝(記録247.5kg)。

昭和23年

第3回福岡国体で丸井太郎がFe級2位入賞。また、総合成績でも3位に入賞した。

昭和24年

第4回東京国体で丸井太郎がFe級2位入賞。

昭和25年

第5回愛知国体で丸井太郎がFe級2位入賞。

昭和26年

9月22日、兵庫県で最初のウエイトリフティング競技会を尼崎中央児童公園屋外特設会場において開催した。大会は正規のルールを採用せず、C&J1種目のみとした。

第6回広島国体で丸井太郎がFe級優勝(記録270.0kg)。

昭和27年

第7回福島国体で丸井太郎がFe級2位入賞。

昭和29年

第11回兵庫国体ウエイトリフティング競技会尼崎市誘致決定。

第9回北海道国体で丸井忠がF級優勝(記録235.0kg)。

昭和30年

兵庫県ウエイトリフティング協会が創立、初代会長に白石市郎、理事長に鞍田健二が就任。

第10回神奈川国体で丸井忠がF級3位入賞。

昭和31年

第11回兵庫国体ウエイトリフティング競技会を尼崎市で開催し、丸井忠が健闘し、B級3位入賞。

昭和34年

兵庫県高体連ウエイトリフティング部

会結成。初代部長に常松喬(当時県体育保健課長)、理事長に八木勇蔵が就任。明石南高・尼崎産高(定)・神戸工高・明石高・飾磨工高と5校での部会の結成であった。

第6回全国高校総体(岡山)に尼崎(尼崎産高)が本県より初めて参加した。

昭和35年

兵庫県高体連ウエイトリフティング部会が正式に承認された。

第17回ローマ・オリンピック大会で三宅義信選手が銀メダルを獲得、相次いで世界記録を更新し、東京オリンピックの有望種目として注目されはじめると共に、高体連の加盟校も増加し、好選手も続出するようになった。

昭和40年

県協会2代目理事長に八木勇蔵が就任。佐野隆(現・県協会理事長)が全日本大学対抗戦において、L級S122.5kgの日本記録を樹立した。

第20回岐阜国体で山本勝成(中央大)が、成年の部F級第3位入賞。

昭和42年

第14回全国高校総体(福井)で武庫工高が学校対抗の部第3位入賞。

中心となった選手は藤代末男(現・県協会副理事長)でLH級でT367.5kgの大会記録で優勝した。

第22回埼玉国体で大橋達夫(神戸西高)が、少年の部F級3位に入賞した。

昭和43年

第23回福井国体で総合成績準優勝。また、個人では、美馬本隆(県尼崎工高)が、少年の部L級優勝(記録335.0kg)。藤代末男(明治大)成年の部M級準優勝(記録400.0kg)。なお、藤代は、S132.5kgのジュニア世界記録を樹立した。

昭和44年

第24回長崎国体で藤代末男(明治大)が、成年の部M級3位入賞(記録410.0kg)。仲曾根正和(明治大)がMH級3位に入賞した。

昭和45年

第17回全国高校総体(和歌山)で姫路東高家島分校が学校対抗の部優勝。高松宮賜旗を初めて兵庫県下へ持ち帰った。家島分校は、1学年2クラス、男子生徒は1学年30名の小規模校である。このように小さな学校が全国高校総体で優勝することは前代未聞のことであり、全国的にも話題になった。指導者は佐野隆(現・県協会理事長・三木東高教)で、創部3年目の快挙であった。佐野は、僻地指定を受けて家島へ自らパーベルを持って赴任し、指導にあたった。

中心となった選手は、北浦寿章がFe級

優勝(記録315.0kg)。岩本繁美F級3位(記録260.0kg)。岡上国治(現・相生産高教)B級5位に入賞した3名である。北浦はS105.0kgの大会記録を樹立した。また、荒木英夫(武庫工高)もL級優勝(記録322.5kg)と大いに健闘した。

第25回岩手国体総合成績優勝。天皇杯を獲得し、初優勝を飾った。

中心となった選手は、成年の部福沢利博(大商大)F級3位(記録307.5kg)。藤代末男(明治大)M級優勝(記録425.0kg)。横山順一郎(中央大)H級3位(記録410.0kg)。少年の部岩本繁美(姫路東高家島)F級準優勝(記録267.5kg)。岡上国治(姫路東高家島)B級準優勝(記録290.0kg)。北浦寿章(姫路東高家島)Fe級優勝(記録317.5kg)。荒木英夫(武庫工高)L級優勝(記録337.5kg)。また、福沢はF級C&J125.0kgの日本記録を樹立した。

第15回全日本選手権大会を尼崎市で開催。藤代末男(明治大)がM級で健闘し、世界選手権大会の日本代表選手に選ばれ、10位(記録415.0kg)に入賞した。

昭和46年

第18回全国高校総体(徳島)で大城進(県尼崎工高)がMH級優勝。

この年も姫路東高家島分校がF級新井宣弘、B級山下光弘、Fe級谷下偉男、L級新井三喜男、M級中村銀造を有し、好チームではあったが全国高校総体での連勝はできなかった。

第26回和歌山国体成年の部藤代末男(明治大)がM級2位(記録425.0kg)に入賞した。

昭和47年

明石北高、高体連加盟。指導者に八木、佐野を迎え、県高体連事務局も明石北高に移った。

第27回鹿児島国体成年の部藤代末男(尼崎市教委)がLH級第2位(記録452.5kg)に入賞した。

昭和48年

第34回全日本選手権大会で藤代末男がLH級優勝(記録320.0kg)。

第20回全国高校総体(三重)で中上明彦(姫路東高家島分校)がF級優勝(記録185.0kg)。

第28回千葉国体少年の部で姫路東高家島分校の中上がF級第2位(記録190.0kg)。山戸保彦もB級2位(記録197.5kg)に入賞した。

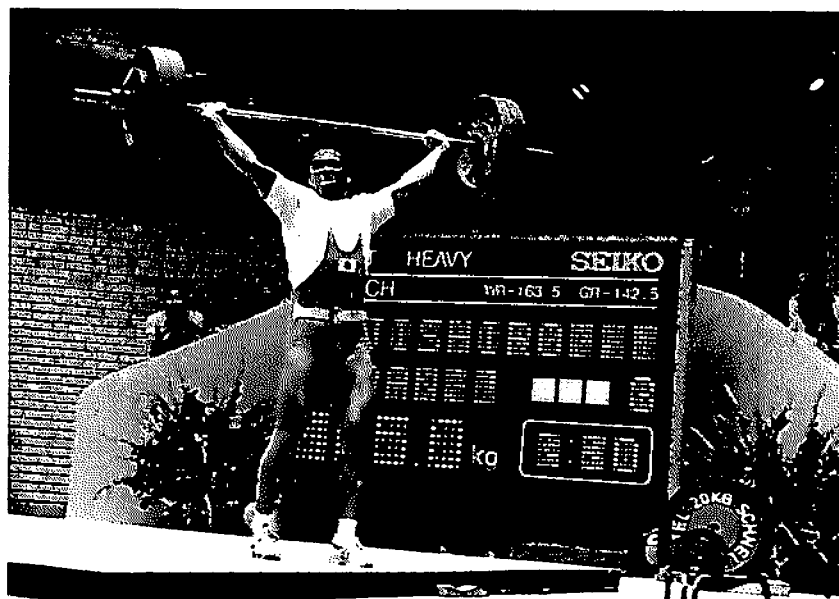
昭和49年

第7回アジア競技大会に藤代末男が出場し、LH級優勝(記録315.0kg)し、金メダルを獲得した。

第35回全日本選手権大会で藤代がLH級優勝(記録322.5kg)。2連覇を飾った。第21回全国高校総体(福岡)で明石北高が学校対抗の部準優勝。

誰を出しても優勝しそうな豪華メンバーであり、優勝は絶対とまで下馬評にまでのぼったが、残念ながら優勝候補のF級山本義雄が失格、松本伊智朗B級4位、常深英登L級4位、岩崎仁志5位、神吉康彦M級4位、高橋義治M級5位の入賞に終わり、準優勝に甘んじた。

第29回茨城国体では成年の部藤代(尼崎市教委)LH級優勝(記録312.5kg)。少年の部では明石北高の松本B級優勝、山本F級優勝、高橋M級優勝と3名の優勝者を出し、全国高校総体の雪辱を



昭和49年、第7回アジア競技大会LH級優勝の藤代末男

果たし、総合成績でも準優勝に入賞した。

昭和50年

第36回全日本選手権大会で藤代がLH級優勝(記録320.0kg)。また、C&Jで185.0kgの日本記録を樹立し、3年連続優勝の偉業を成し遂げた。

第22回全国高校総体(山梨)で鶴澤隆治(明石北高)がB級3位に入賞した。

第30回三重国体成年の部岩本繁美(日ノ本土木)がFe級2位(記録247.5kg)。藤代(尼崎市教委)がLH級優勝(記録322.5kg)。少年の部黒崎浩二(姫路東高家島)がB級3位(記録192.5kg)に入賞した。

昭和51年

第21回モントリオール・オリンピック大会(カナダ)で八木勇蔵が日本選手団監督を務め、藤代木男(尼崎市教委)が初めて兵庫県から出場し、LH級7位に入賞(記録315.0kg)した。

第23回全国高校総体(長野)で黒崎(姫路東高家島)Fe級3位(記録207.5kg)。宮内日出夫(明石北高)M級3位(記録215.0kg)。三谷勝彦(明石北高)LH級3位(記録222.5kg)に入賞した。

第31回佐賀国体少年の部黒崎がFe級3位(記録207.5kg)に入賞。

昭和52年

第24回全国高校総体(岡山)で小高正宏(明石北高)が52kg級優勝(記録190.0kg)。

第32回青森国体少年の部小高(明石北高)が52kg級2位(記録202.5kg)に入賞した。

昭和53年

明石市選手権大会で小高がS97.5kgの日本高校記録を樹立。

昭和54年

県協会3代目理事長に佐野隆が就任。現在に至る。

第26回全国高校総体を明石市(明石高)で開催。選手強化、大会運営に万全の態勢を整えた。学校対抗では明石北高、明石南高の2校が出場したが入賞はできなかった。個人では中西正明(明石南高)52kg級3位(記録185.0kg)。岡田富士則(姫路東高家島)56kg級2位(記録200.0kg)と健闘し、会場を沸かせた。

第34回宮崎国体少年の部中西(明石南高)52kg級3位(記録202.5kg)。三木聖士(明石北高)60kg級2位(記録220.0kg)に入賞。

昭和55年

第27回全国高校総体(愛媛)で久保敬(舞子高→現・淡路農高教)が67.5kg級優勝(記録247.5kg)。白石嘉宏(武庫工

高)が56kg級2位(記録247.5kg)に入賞した。

第35回栃木国体成年の部小高正宏(日本体育大)が52kg級優勝(記録235.0kg)。また、C&J135.0kgの日本記録を樹立した。少年の部久保敬(舞子高)が67.5kg級2位(記録237.5kg)に入賞した。なお、小高は県民体育大会で52kg級C&J133.0kgのジュニア世界記録を樹立した。

昭和56年

第28回全国高校総体(群馬)で生頼俊秀(明石南高)が60kg級優勝(記録222.5kg)。白石(武庫工高)が67.5kg級優勝(記録250.0kg)。

第36回滋賀国体総合成績準優勝。少年の部生頼が60kg級優勝(記録225.0kg)。白石が67.5kg級優勝(記録255.0kg)。また、同選手は、C&J150.5kgの日本高校記録を樹立した。

昭和57年

第29回全国高校総体(鹿児島)で久保博(県尼崎工高)が100kg級2位(記録230.0kg)に入賞した。

小高正宏(県立盲学校教)が県民体育大会で56kg級T260.0kgの日本記録を樹立した。

第37回島根国体成年の部小高が56kg級優勝(記録255.0kg)。少年の部久保博が82.5kg級3位(記録230.0kg)に入賞した。

昭和59年

第29回全日本選手権大会で小高が56kg級優勝(記録262.5kg)。

第23回ロサンゼルス・オリンピック大会で佐野隆が日本選手団支援コーチを務め、小高正宏(県盲学校教)が56kg級

に出場し、3位(記録252.5kg)入賞、銅メダルを獲得した。

第31回全国高校総体(秋田)で芦谷竜司(舞子高)が60kg級2位(記録212.5kg)。中村仁(舞子高)が100kg級優勝(記録270.0kg)。

第39回奈良国体成年の部小高が60kg級優勝(記録260.0kg)。52kg~60kg級の3階級を制覇した。少年の部では中村が90kg級2位(記録260.0kg)入賞。なお、中村は、阪神高校選手権大会で100.0kg級C&J160.0kg・T280.0kgの日本高校記録を樹立した。

昭和60年

第30回全日本選手権大会兼日韓親善大会を尼崎市で開催。小高が56kg級で2年連続優勝(記録257.5kg)。

第32回全国高校総体(石川)で松原誠一郎(舞子高)が67.5kg級2位(記録235.0kg)。また、小林政義(県立盲学校)が52kg級Sで2位(記録87.5kg)と健闘した。

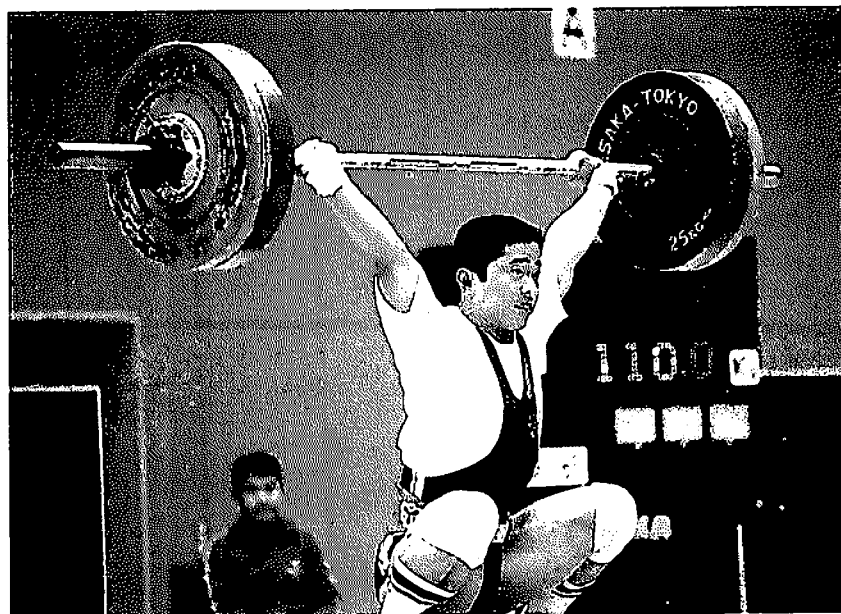
第40回鳥取国体成年の部小高が56kg級優勝(記録255.0kg)。中西正明(明石市教委)が60kg級2位(記録255.0kg)。生頼俊秀(日本体育大)が67.5kg級2位(記録280.0kg)に入賞した。

昭和61年

県協会2代目会長に鴻池祥肇が就任。現在に至る。

第1回全国高校選抜大会(神奈川)で頭市学(相生産高)が67.5kg級3位(記録230.0kg)。鶴谷賢司(尼崎東高)が100kg級で優勝(記録255.0kg)した。

第33回全国高校総体(山口)で鶴谷賢司(尼崎東高)が100kg級で優勝(記録275.0kg)した。



第23回ロサンゼルスオリンピック大会56kg級銅メダルを獲得した小高正宏

第41回山梨国体総合成績準優勝。少年の部頭巾学が67.5kg級優勝(記録252.5kg)。鶴谷が90kg級優勝(記録275.0kg)。また、鶴谷は、阪神高校選手権大会で100kg級S127.5kg、C&J172.5kg、T300.0kgと3種目において日本高校記録を樹立した。

昭和62年

第2回全国高校選抜大会(埼玉)で明石南高の森朋広が60kg級2位(記録217.5kg)。西村一宏が67.5kg級2位(記録240kg)。井上良之(神戸弘陵高)82.5kg級優勝(記録250.0kg)。徳山浩明(須磨友が丘高)100kg級2位(記録250.0kg)に入賞した。

第34回全国高校総体(北海道)で明石南高校が学校対抗の部優勝。得点23点で3校が並び、上位入賞者により劇的な勝利を収め、17年ぶりに高松宮賜旗を兵庫県下へ持ち帰った。

指導者は篠田健治と深谷幸三で13年目の快挙であった。篠田は大学より競技を始め、全日本大学個人戦B級優勝等、好成績を収めている。

その後も熱心に競技に取り組み、優秀な選手を育てた。勝因は森朋広が60kg級2位(記録217.5kg)に入賞したこと。エース西村一宏が67.5kg級(記録242.5kg)で実力を遺憾なく発揮し、優勝したこと。伏兵田口博明が75kg級5位に入賞したことに尽きるが、主将水田昌利選手82.5kg級を始め、チームワークの良さも見逃せない事実であった。

第42回沖繩国体総合成績3位。成年の部小高(明石北教)が60kg級3位(記録260.0kg)。少年の部西村(明石南高)が67.5kg級優勝(記録255.0kg)。井上(神戸弘陵高)が82.5kg級で優勝(記録260.0kg)した。

昭和63年

第3回全国高校選抜大会(愛知)では、舞子高の宇都宮広明(52kg級優勝)、荒木邦弘(56kg級2位)、横川淳二(相生産高)が60kg級3位。田口六光(県尼崎工高)が110kg級で2位に入賞した。第35回全国高校総体が洲本市(洲本実高)で開催。3年前より洲本実高、津名高など淡路地区へ競技の普及を図り、3年計画の選手強化、大会運営に力を注いだ。また、大会期間中に台風に見舞われ、テントが飛ばされるというアクシデントもあったが、県協会役員・補助員などの献身的な努力により大会を成功裡に導いた。学校対抗では舞子高、洲本実高の2校が出場し、舞子高が8位入賞を果たした。個人では、藤井(滝川第二高)が67.5kg級優勝。西海

康博(明石南高)が75kg級2位。荒木が56kg級3位と健闘し、大会を盛り上げた。

第41回京都国体では、少年の部宇都宮(舞子高)が52kg級S・C&J2位。藤井(滝川第二高)が67.5kg級C&J第2位。成年の部中西(県警)が52kg級S・C&J優勝。鶴谷(日本体育大)が100kg級C&J3位。中村仁(日本大)が+110kg級S・C&J3位と健闘し、総合成績で天皇杯準優勝を果たした。

平成元年

第4回全国高校選抜大会を明石市(明石南高)で開催。納富俊行(舞子高)が52kg級優勝。村田和也(尼崎東高)が56kg級3位。村田和謙(尼崎工高)が67.5kg級2位。車崎太一(洲本実高)が100kg級2位に入賞する等、各階級で地元選手が活躍し、大会を盛り上げた。第36回全国高校総体(徳島)では、納富(舞子高)が52kg級優勝。村田和也(尼崎東高)が56kg級3位。小松博(津名高)が60kg級優勝。村田和謙(尼崎工高)が67.5kg級2位。佐野衛(明石南高)が75kg級3位。車崎(洲本実高)が100kg級3位と各階級で上位入賞を果たし、高校生の競技力は全国的にトップレベルとなった。

9月、フェスティック大会を神戸市(しあわせの村)で開催し、世界各国から優秀な選手が集い、ベンチP競技会が行われ、各競技役員として大会運営にあたった。

同月、第44回北海道国体が士別市で開催され、16年ぶり、2度目の総合優勝を果たし、天皇杯を獲得した。個人では、少年の部納富(舞子高)が52kg級C&J優勝。小松(津名高)が60kg級S3位・C&J優勝。村田和謙(県尼崎工高)が67.5kg級S優勝・C&J2位。成年の部中西(県警)が56kg級S・C&J優勝。小高(明石北教)が60kg級S・C&J2位。鶴谷(日本体育大)が100kg級S第3位・C&J2位。徳山(中央大)が+110kg級S2位・C&J6位と出場選手全員が入賞し、天皇杯得点で山梨県と並んでのアベック優勝であった。その後、納富は、尼崎市民スポーツ祭で52kg級C&J123.0kgの日本高校記録を樹立した。

平成2年

鶴谷賢司(尼崎東高→日本体育)が、第11回アジア競技大会(北京)100kg級に出場し、3位(記録320.0kg)入賞、銅メダルを獲得した。

第5回全国高校選抜大会(山梨)では、吉原祐介(舞子高)が52kg級3位。上村

琢(舞子高)が56kg級3位。大岡賛楯(舞子高)が82.5kg級3位。佐野衛(明石南高)が75kg級優勝。堂本典孝(明石南高)が82.5kg級2位と大活躍した。また、佐野はS130.0kgの日本高校記録を樹立した。

第37回全国高校総体(宮城)では、佐野(明石南)が75kg級優勝。橋本隆芳(明石北高)が+100kg級優勝。吉原(舞子高)が52kg級3位。上村(舞子高)が56kg級2位。中井成彦(須磨友が丘高)が56kg級3位入賞と健闘した。

第45回福岡国体で少年の部吉原(舞子高)が52kg級S・C&J3位。中井(須磨友が丘高)が56kg級S2位・C&J第3位。佐野(明石南高)が75kg級S・C&J優勝と3種目に大会記録を樹立した。成年の部井上良之(明治大)が90kg級S2位・C&J優勝。鶴谷(日本体育大)100kg級S3位・C&J優勝し、総合成績で天皇杯3位に入賞した。

その後、佐野は75kg級S130.0kg、C&J157.5kg、T302.5kgの日本高校記録を樹立し、砂岡良治選手の持つ記録を10年ぶりに更新した。

平成3年

第6回全国高校選抜大会(石川)では、大下章紀(明石北高)が67.5kg級優勝。斎藤和巳(三木東高)が52kg級3位。武貞大地(舞子高)が75kg級3位に入賞した。

第38回全国高校総体(静岡)では、大下(明石北高)が67.5kg級優勝。斎藤(三木東高)が52kg級2位。武貞(舞子高)が75kg級3位に入賞した。

第46回石川国体では、成年の部中西(県警)が56kg級S優勝。井上(明治大)が90kg級S3位。少年の部斎藤(三木東高)が52kg級C&J優勝。大下(明石北高)が67.5kg級S優勝。武貞(舞子高)が75kg級C&J優勝と全員が種目優勝を果たした。

平成4年

第7回全国高校選抜大会(千葉)では、木村一彦(相生産高)が56kg級3位。藤田健太郎(舞子高)が60kg級優勝。上野栄介(舞子高)が75kg級2位。また、この年より第1回女子大会も同時に行われ、長谷川陽子(三木東高)が48kg級2位。高市卓子(尼崎小田高)が52kg級優勝。出世ゆかり(尼崎小田高)が60kg級3位に入賞した。

第39回全国高校総体(宮崎)学校対抗の部で接戦の末、舞子高校が優勝。5年ぶりに高松宮賜旗を再び兵庫県下へ持ち帰った。指導者は横山信仁である。同氏は今までにも毎年のように優秀な

選手を育てあげている。学校対抗においては、昭和63年8位、平成元年5位、平成2年6位、そして平成4年、遂に念願であった優勝を手中にした。創部18年目の快挙であった。今年も各階級に有望選手をそろえ、大会前から優勝候補の呼び声が高かったが、いざフタを開けてみると大量得点が期待されていた軽量級が振るわず、苦しい滑り出しであった。決着は最終日にまでもつれ込み、主将82.5kg級上野栄介の両腕に逆転優勝の望みをつないだ。その上野がプレッシャーをはねのけ優勝。前日までリードをしていた宮城県農業高校を得点2点の僅差で振り切った。中心となった選手は、湯本浩章(52kg級第8位)、増井幸洋(52kg級)、和田実(56kg級第4位)、藤田健太郎(60kg級第4位)、阪本健史(67.5kg級)、上野栄介(82.5kg級優勝)である。苦戦の末、初優勝を飾った陰には横山氏の日々の厳しい練習や素晴らしい指導法があったことを忘れてはならない。

第47回山形国体では、少年の部湯本(52kg級C&J2位)。和田(56kg級S2位)。上野(82.5kg級S、C&J優勝)と舞子高トリオが大活躍した。

平成5年

第8回全国高校選抜大会(愛知)では、山本亮(明石北高)が54kg級2位。59kg級木村一彦(相生産高)が優勝。石井庸介(舞子高)が3位入賞。また、第2回女子大会では、長谷川陽子(三木東高)が50kg級で優勝した。

第41回全国高校総体(愛知)では、54kg級石井庸介(舞子高)が優勝。山本亮(明石北高)が3位。59kg級木村一彦(相生産高)が2位に入賞した。

第48回徳島国体では、成年の部村田和謙(県尼崎工高職)が83kg級S第2位・

C&J3位入賞。少年の部石井(舞子高)が54kg級C&J122.5kgの日本記録を挙げ、見事優勝。木村(相生産高)が59kg級S・C&J優勝。八家選手(相生産高)が91kg級C&J3位に入賞した。

平成6年

第9回全国高校選抜大会(茨城)では、羽藤辰雄(明石南高)が59kg級2位。八家信也(相生産高)が83kg級3位に入賞した。

第54回全日本選手権大会(東京)で納富(舞子高教)が54kg級で優勝(記録242.5kg日本タイ)した。また納富は、近畿社会人大会において54kg級C&J140.0kgの日本記録を樹立した。

第41回全国高校総体(富山)では、羽藤(明石南高)が59kg2位。八家(相生産高)が91kg級2位に入賞した。

第12回アジア競技大会(広島)に納富俊行(舞子高→舞子高教)が54kg級に出場し、3位(記録245.0kg日本新)入賞、銅メダルを獲得した。また、佐野衛(明石南高→自衛隊体育学校)が+108kg級に出場し、5位(記録360.0kg)に入賞した。

第49回愛知国体では、成年の部納富(舞子高教)が54kg級S2位・C&J優勝。村田和謙(県尼崎工高職)が83kg級S2位。少年の部山上智博(舞子高)が54kg級S3位。羽藤(明石南高)が59kg級S・C&J優勝。八家(相生産高)が91kg級C&J2位入賞。

平成7年

第10回全国高校選抜大会(京都)では、菊妻康司(相生産高)が54kg級2位に入賞した。

第55回全日本選手権大会(福島)で村田和謙(県尼崎工高職)が91kg級S152.5kgの日本記録を樹立した。

第9回全国女子選手権大会では、佐藤

宜子(サラスポーツクラブ)が54kg級で優勝。

第50回福島国体では、成年の部納富(舞子高教)が54kg級S・C&J優勝。村田和謙(県尼崎工高職)が91kg級S2位。少年の部2年生菊妻(相生産高)が54kg級S・C&Jにおいて優勝。坂下篤史(淡路農高)が64kg級C&J2位に入賞した。

第67回世界選手権大会(北京)に納富俊行(県尼崎工高教)が54kg級に出場し、6位(記録247.5kg、日本記録を樹立)入賞した。現在、アトランタオリンピック大会日本代表選手として内定している。

〈現役員〉

会 長	鴻池 祥肇			
副 会 長	八木 勇蔵	生頼 佳一		
理 事 長	佐野 隆			
副理事長	藤代 末男	小高 正宏		
理 事	池内 淳	森山 年章		
	横山 信仁	吉川 英治		
	山平 芳樹	関野 卓正		
	深谷 幸三	篠田 健治		
	岡上 國治	國家 恭一		
	阪田 幸次	山口 晋		
	久保 敬	生頼 俊秀		
	林 宏介	山北 正雄		
	町支 一夫	村上 公男		
	河島 完治	永穂 康弘		
	根本 晃	宮崎 弘		
	宮下 克明	大橋 逸夫		
	中村 銀造	笹田 一之		
	馬本 雅之	松本伊智朗		
	中川 和実	中西 正明		
	藤田 利幸	鶴澤 陸治		
	小田 慶喜	島田 陸宏		
	堀北 昌孝	井藤 秀治		

奈良県

事務局 〒638 奈良県吉野郡下市町阿知賀2805
北 實 TEL 07475-2-5540

歴代会長

初代 木村鷹之助 (昭和26年～現在)

沿革

協会創立以前

奈良県吉野郡東吉野村出身の南治作が東京に在住のとき、重量挙げ競技に興味をもち練習に励み、個人で国民体育大会に出場し2位に入賞した。以後連続して国民体育大会に出場した。南氏が故郷の東吉野村に帰られたとき、この競技が素晴らしいことを同郷の坪井貞幸に話し、奈良県でこの競技を普及しようとしたが、競技規則が分からず、どんな器具を使いどんな練習をすればよいか全然分からなかった。これらの詳しいことは、坪井がいろいろと苦勞したが既に故人になっているので分からない。

協会創立に至る経緯

昭和26年

会長 木村鷹之助
副会長 南 治作
理事長 坪井 貞幸
理事 藤田 昌輝
根垣 頼信

奈良県ウエイトリフティング協会を創立し、奈良県体育連盟(現奈良県体育協会)に加盟申請を行い、県理事長会において承認される。

また、引き続き日本重量挙げ協会に加盟申請を行い、承認される。

協会ではできたものの用具がなく練習ができないので、檜の木でシャフトを作り、外側をブリキで作りコンクリートを流し込んでデスクを自作し、練習に励むが、デスクが割れたりして用具には非常に苦勞した。

年次別概況

昭和27年

第7回福島県平市での国体に初出場する。全国の様子を見聞し、ルールはどうか、器具はどうか、プラットフォームはどうか、練習方法はどうかすればよいか、参加都道府県の監督さんに教えてもら

う等いろいろな事柄を研究する。

昭和29年

第9回北海道国体に近畿チームとして出場することになり、予選大会を奈良県立大淀高等学校体育館を会場として開催する。器具は一応準備ができた。プラットフォームは本県吉野郡特産の杉材(3寸角の柱用材)を並べて作るなどいろいろ苦勞はあったが、これを機会に近畿大会を各府県持ち回りで開催することができたことは大変よかったと思う。

昭和39年

副会長南治作の後任に坪井貞孝が、理事長に藤田昌輝が就任する。

昭和57年

第39回(昭和59年)奈良国体開催の準備のため本部協会より会場並びに諸設備の指導を受ける。理事長が役場職員、体協、体指の方々にルール、競技会の流れを説明する。

昭和58年

第39回奈良国民体育大会開催のリハーサル大会として第20回全日本社会人選手権大会、第11回全日本実業団選手権大会、第1回全日本マスターズ選手権大会を競技役員及び各種団体の協力により成功させ、わかくさ国民体育大会に向かって

さらに準備すべき事項について何回となく会議をもった。特に民泊については下市区長が各区民の協力を依頼される。

昭和59年

第39回奈良(わかくさ)国民体育大会を下市町

総合体育館(成年)、下市町立下市小学校体育館(少年)をそれぞれの会場として開催する。競技会役員、競技役員、競技補助員、各種団体、民泊を引き受けてくださった下市区内お陰をもち、無事に終了することができた。尚国体を機に少年の部が創設された。

平成2年

副会長の坪井貞幸死去、根垣頼信が副会長に就任する。

平成7年

藤田昌輝が副会長に、北實が理事長に就任する。

現役員

会長	木村鷹之助
副会長	根垣 頼信
	藤田 昌輝
理事長	北 實
理事	威徳 猛 石田 賀
	鎌田 勝朗 木村 清次
	小南 善徳 阪田 三良
	島田 好人 早瀬 昇
	水口 善造 道下 健一
	南 忠實 山本 陸雄
	中本 勇次 佃 俊隆
	植田 昭典 大谷 晃司



国体入場行進中の奈良県選手団(昭和60年)

和歌山県

事務局 〒641 和歌山県和歌山市西浜3丁目6-1 和歌山工業高等学校内
高橋 次夫 TEL 0734-44-0158

〈年次別概況〉

昭和35年

4月、和歌山県WL協会創立、和歌山県体育協会に加盟。

会長 小野真次(元知事)、理事長 宇治田省三(現市長)

昭和37年

10月、国民体育大会初参加(岡山県)。監督吉川敏夫、杉原敬藏、白山輝雄、吉村清治と、当時ボディビルを行っていた選手はウェイトリフターとして参加する、見よう見まねの競技であった。

昭和39年

4月、和歌山北高校に県下で初のWL部を創立(顧問・前川三郎)。顧問になってくれる先生はなかなかなく、無理に前川先生になって頂き、上記選手によって指導がなされ、学校端でプラットフォームもなく地上で行う。

昭和41年

4月、会長に宇治田省三、理事長に山田修就任。

和歌山工業高校に部を創立。

昭和42年

4月、和歌山県高等学校体育連盟に加盟。

昭和43年

4月、南部高校に部創立。(顧問・山下忠昭)、和北高(顧問・青山喬一)。

昭和44年

4月、串本高校に部創立。(顧問・三宅俊次)。

全国高校総合体育大会に初出場。

昭和45年

4月、会長に中川清、和歌山北高校に高橋次夫着任。

8月、全国高校総合体育大会実施(串本町)

L級第8位、池田権次(和工)

T280kg

昭和46年

8月、全国高校総体(徳島)。

F級第3位、三原豊(和北)

T255kg

10月、第26回国民体育大会実施(串本町)

F級第1位、浜口晃一(串本)

T265kg

歴代会長

初代 小野 真次 (昭和35年～)

第2代 宇治田省三 (昭和41年～)

第3代 中川 清 (昭和45年～)

第4代 宇治田省三 (昭和56年～)

第5代 宇治田栄藏 (昭和63年～)

B級第7位、三原 豊(和北)

T252.5kg

LH級第7位、岩本紀之(串本)

T292.5kg

昭和47年

4月、串本高校に加茂富夫着任。

昭和48年

8月、全国高校総体(三重)

団体の部第6位(和工)、得点15点

F級第7位、絹川和教(和工)

T172.5kg

B級第6位、小山 治(和工)

T187.5kg

MH級第8位、田渕 昭(南部)、

T192.5kg

昭和48年

4月、新設校和歌山東高校に部創立(顧問・安保重明)

和歌山工業定時制高校廃部。

昭和50年

4月、本年より国体出場権は少年の部3名、成年の部4名と訂正。

南部高校自然廃部。

10月、第30回国民体育大会(三重)

F級第8位、三原 豊(大商大)

T195kg

Fe級第7位、安保重明(和東教員)

T240kg

昭和51年

4月、吉備高校に部を創立。(顧問 岩尾暹)

8月、全国高校総体(長野)

MH級第6位、南方功吉(和東)

T207.5kg

10月、第31回国民体育大会(佐賀)

F級第8位、三原 豊(八栄商会)

T187.5kg

中川清会長が藍綬褒賞を受賞。

昭和52年

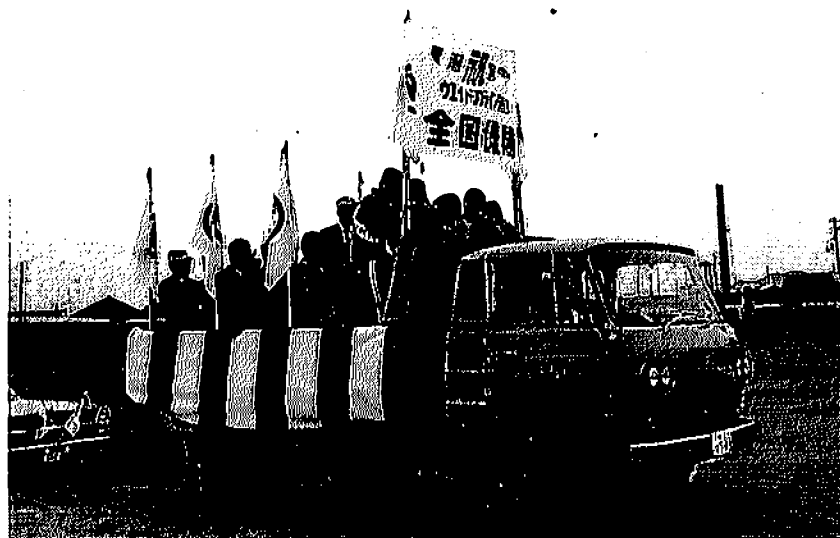
8月、全国高校総体(岡山)

56kg級第1位、笠松敏夫(和工)

T207.5kg

60kg級第1位、森本 進(串本)

T220kg



昭和46年、第26回国体(串本町)での優勝パレード

90kg級第5位、南 昌彦(和東)
T205kg
10月、第32回国民体育大会(青森)
56kg級第2位、笠松敏夫(和工)
T207.5kg
60kg級第1位、森本 進(串本)
T235kg
少年の部第3位
100kg級第8位、南方功吉(大商大)
T245kg

天皇杯第6位、5.5点獲得。

昭和53年

6月、第2回アジアユース選手権大会(マニラ)
60kg級第1位、森本 進(串本)
T240kg
8月、全国高校総体(山形)
67.5kg級第7位、瓜田明義(串本)
T215kg
90kg級第8位、小路景也(和工)
T195kg
日本高校新記録樹立、60kg級、森本進(串本)
S110.5kg

10月、第33回国民体育大会(長野)
52kg級第8位、重田英明(和工)
T180kg
67.5kg級第5位、瓜田明義(串本)
T220kg
110kg級第6位、南方功吉(大商大)
T240kg

昭和54年

8月、全国高校総体(兵庫)
67.5kg級第1位、瓜田明義(串本)
T250kg
9月、第1回日韓ユース大会(ソウル)
67.5kg級第1位、瓜田明義(串本)
T255kg

10月、第34回国民体育大会(宮崎)
67.5kg級第1位、瓜田明義(串本)
T250kg
75kg級第7位、中崎弘一(串本)
T222.5kg
90kg級第6位、坂上嘉昭(和工)
T220kg
110kg級第6位、南方功吉(大商大)
T252.5kg

11月、中川清会長 死去

昭和55年

8月、全国高校総体(愛媛)
82.5kg級第6位、袋田裕章(串本)
T217.5kg
90kg級第4位、杉本幸男(和工)
T235kg
第2回日韓ユース大会(群馬)
100kg級第1位、杉本幸男(和工)
T220kg

10月、第35回国民体育大会(栃木)

82.5kg級第8位、袋田裕章(串本)
T227.5kg
90kg級第5位、杉本幸男(和工)
T240kg
110kg級第7位、南方功吉(大商大)
T270kg

(会長に宇治田省三、副会長に山田修、理事長に小田富男)

昭和56年

8月、全国高校総体(群馬)
60kg級第7位、寺岡久幸(串本)
T205kg
90kg級第2位、杉本幸男(和工)
T247.5kg
9月、第14回近畿高校選手権大会(初)
団体の部第1位、和歌山工業高校(初)
10月、第36回国民体育大会(滋賀)
52kg級第6位、奥野幸宏(和東)
T185kg
60kg級第7位、寺岡久幸(串本)
T207.5kg
90kg級第1位、杉本幸男(和工)
T257.5kg

少年の部第4位
110kg級第8位、南方功吉(大弘建材)
T265kg
天皇杯第6位、5.5点獲得

昭和57年

8月、全国高校総体(鹿児島)
52kg級第1位、庄司晃久(和工高)
10月、第37回国民体育大会(島根)
52kg級第2位、庄司晃久(和工高)
110kg級第8位、南方功吉(大弘建材)

昭和58年

8月、全国高校総体(名古屋)
52kg級第3位、堂野 哲(和工高)
" 第8位、尾崎幸生(吉備高)

60kg級第3位、服部昌典(和北高)
67.5kg級第8位、杉本法昭(和工高)
10月、第38回国民体育大会(群馬)
52kg級第5位、堂野 哲(和工高)
60kg級第4位、服部昌典(和北高)
90kg級第7位、西上嘉人(和工高)
56kg級第8位、庄司晃久(日体大)
60kg級第7位、笠松敏夫(箕島高教)

11月、全日本社会人兼実業団大会(奈良)
67.5kg級第4位、笠松敏夫(箕島高教)
90kg級第3位、古川太賀男(東燃KK)

110kg級第2位、南方功吉(大弘建材)
昭和59年

8月、全国高校総体(秋田)
52kg級第7位、西 英二(和工高)
67.5kg級第3位、北野陽二(串本高)
82.5kg級第6位、西上嘉人(和工高)
団体第6位、和工高14点
10月、第39回国民体育大会(奈良)
60kg級第1位、北野陽二(串本高)
56kg級第7位、庄司晃久(日体大)
11月、全日本社会人・実業団大会(鳥取)
67.5kg級第5位、笠松敏夫(箕島高教)

82.5kg級第7位、坂上嘉昭(大阪ガス)

昭和60年

8月、全国高校総体(石川)
60kg級第2位、恩地幹夫(和工高)
団体第6位、和工高15点
10月、第40回国民体育大会(鳥取)
60kg級第3位、恩地幹夫(和工高)
82.5kg級第3位、雑賀俊企(")
11月、全日本社会人兼実業団大会(山



昭和60年、第40回団体選手団

梨)
75kg級第8位、笠松敏夫(和北高教)
82.5kg級第7位、坂上嘉昭
(大阪ガス)

昭和61年

8月、全国高校総体(山口)
52kg級第3位、森下良平(串本高)
10月、第41回国民体育大会(山梨)
52kg級第4位、森下良平(串本高)
3月、第2回全国高校選抜大会(埼玉)
75kg級第6位、山崎輝司(串本高)

昭和62年

8月、全国高校総体(北海道)
75kg級第6位、山崎輝司(串本高)
10月、第42回国民体育大会(沖縄)
52kg級第6位、森下良平(大商大)
67.5kg級第8位、恩地幹夫(日体大)
56kg級第7位、福田 隆(和工高)
67.5kg級第8位、大江政雄(串本高)
75kg級第4位、山崎輝司(串本高)
11月、全日本社会人・実業団・マスターズ大会(京都)

56kg級第6位、中村智彦(市役所)
75kg級第4位、高橋次夫(和工高教)

昭和63年

9月、全日本社会人・実業団・マスターズ大会(北海道)
60kg級第8位、中西康彦(日新建設)
67.5kg級第3位、服部昌典(剂盛堂)
75kg級第3位、高橋次夫(和工高)
10月、第43回国民体育大会(京都)
52kg級第4位、堀 好勝(九共大)
56kg級第8位、森下良平(大商大)

平成元年

8月、全国高校総体(徳島)
+100kg第4位、水本健二(串本高)
9月、第44回国民体育大会(北海道)
60kg級第7位、森下良平(大商大)
75kg級第8位、雑賀俊企(日体大)
60kg級第7位、平山龍一(串本高)
75kg級第4位、丸木 馨(和工高)
100kg級第4位、水本健二(串本高)
10月、67.5kg級第7位、杉原敬蔵(住商液化ガス)
67.5kg級第5位、服部昌典(司鉄工)
75kg級第4位、高橋次夫(和工高教)
100kg級第6位、岡昭浩(丹生中教)
" 第8位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

平成2年

10月、第45回国民体育大会(福岡)
60kg級第4位、森下良平(大商大)
11月、全日本社会人兼実業団マスターズ大会(石川)

60kg級第3位、服部昌典(司鉄工)
75kg級第4位、高橋次夫(和工高教)
90kg級第8位、森本圭助(自営)
100kg級第2位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

56kg級第5位、井口尚美(和東高)

平成3年

8月、第5回全国中学生大会(徳島)
64kg級第3位、安保敦史(那賀中)
" 第5位、久徳哲也(東和中)
10月、第46回国民体育大会(石川)
75kg級第6位、丸木 馨(日体大)
第9回全日本マスターズ大会(北海道)
67.5kg級第2位、杉原敬蔵
(住商液化ガス)
75kg級第4位、芝村好央
(ノーリツ網機)
90kg級第3位、森本圭助(自営)
100kg級第1位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

平成4年

5月、全日本選手権大会(千葉)
75kg級第3位、丸木 馨(日体大)
8月、第6回全国中学生大会(栃木)
68kg級第2位、久徳哲也(東和中)
72kg級第3位、高野陽司(〃)
11月、第20回全日本実業団大会(徳島)
83kg級第3位、服部暁彦(内山商半)
90kg級第3位、沖 良幸(大栄商半)
第10回全日本マスターズ大会(徳島)
67.5kg級第3位、杉原敬蔵
(住商液化ガス)
90kg級第2位、森本圭助(自営)
100kg級第1位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

平成5年

8月、第7回全国中学生大会(群馬)
54kg級第1位、栗山 眞(日進中)
10月、第48回国民体育大会(徳島)
76kg級第4位、丸木 馨(日体大)
76kg級第6位、堂浦雄大(紀北高)
11月、第11回全日本マスターズ大会(愛知)
70kg級第2位、杉原敬蔵
(住商液化ガス)
108kg級第1位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

平成6年

8月、全国高校総体(富山)
99kg級第5位、石井幸治(和工高)
11月、第30回全日本実業団大会(福島)
59kg級第3位、西浦徹也(本州化学)

第12回全日本マスターズ大会(福島)
64kg級第2位、杉原敬蔵
(エルビレックス)
70kg級第3位、芝村好央
(ノーリツ網機)

91kg級第2位、森本圭助(自営)
108kg級第1位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)

3月、第10回全国高校選抜大会(京都)
83kg級第4位、久徳哲也(和工商)
70kg級第2位、坂東さやか(和工商)

平成7年

5月、第55回全日本選手権大会(福島)
76kg級第3位、丸木 馨(県教育庁)
8月、第9回全国中学生大会(北茨城)
46kg級第1位、垣内道光(有功中)
70kg級第3位、松下正典(城東中)
10月、第50回国民体育大会(福島)
76kg級第2位、丸木 馨(県教育庁)
54kg級第7位、古田隆規(和工商)
70kg級第8位、安保敦史(和工商)
83kg級第6位、久徳哲也(和工商)
11月、第32回全日本社会人大会(東広島)

76kg級第3位、丸木 馨(県教育庁)
第13回全日本マスターズ大会(東広島)
64kg級第1位、杉原敬蔵
(エルビレックス)

91kg級第1位、森本圭助(自営)
+108kg級第2位、寺田泰夫
(ユアサバッテリー)
ひろしま記念杯女子大会(東広島)
70kg級第3位、坂東さやか(和工商)

<現役員>

会 長	宇治田崇蔵
副会長	山田 修 杉原 敬蔵
理事長	高橋 次夫
理 事	岡 紀生 中村 勳 安保 重明 坂東 孝彦 池田 楠次 加茂 富夫 林 正 三原 豊 四宮 義規 笠松 敏夫 坂上 嘉昭 中川 隆人 東 照雄 浜口 晃一 岩本 紀之 絹川 和教 磨門 明 中村 智彦 小上 利夫 森本 圭助 芝村 好央 寺田 泰夫 西上 嘉人 岡 昭浩 服部 昌典 塚本 貞治

鳥取県

事務局 〒681 鳥取県岩美郡岩美町浦富2610
田中 尚樹 TEL0857-26-1611

沿革

協会創立以前

太平洋戦争後、本県のスポーツ界が急激な発展を遂げている中で、ウェイトリフティング(以下WLと略称)競技に対する一般の関心はきわめて低かった。ところが、昭和39年の東京オリンピックで、三宅義信選手がFe級で優勝した模様などがテレビで全国に放送されると、WL競技独特の緊張感と迫力が若者たちを引きつけ、人気を呼ぶようになった。

そうした中で、昭和40年4月、本県WL協会の生みの親である福嶋章一が兵庫県尼ヶ崎工業高校から鳥取西工業高校に赴任してきた。当時、福嶋は県下で唯一のWL経験者であった。さっそく30名の生徒を集めて同好会を結成し、岸秀正校長や教職員の全面的な支援を受けて、同校の電気実習室で練習を開始した。本県におけるWL競技の誕生である。しかし、用具は日本体育協会が未普及競技の普及奨励事業で送ってくれた、東京オリンピックのWL競技に使用されたというパーベル1式があるだけであった。鉄道の枕木を敷き詰めてプラットフォームとし、自転車のチューブをエキスパンダーの代わりにするなど、工夫をこらしながらのトレーニングであった。

昭和41年には、このような地道な努力が認められて同好会は部に昇格し、部員と職員の手作りながらプレハブの練習場もでき上り同校の練習もいっそはずみがついた。

協会創立に至る経緯

この年、WL協会がないのは鳥取を含む4府県であった。このため協会の設立が緊急課題となっており、福嶋は県教育委員会体育保健課の指導を受けながら組織づくりに奔走し、昭和42年4月1日に鳥取県WL協会を設立、同6月に鳥取県体育協会に加盟した。初

代役員は会長が岸秀正、理事長が福嶋章一、理事が浜口隆一、長田義明、森淳美、宮脇通明。このうち森と宮脇は県教委体育保健課の職員で、人材不足のため変則的な役員メンバーでのスタートであった。

当初は、会員は高校生を主体に30人。財源不足は目を覆いたくなるほどで、県体協に納める負担金など、福嶋が月給の中から自腹を切るありさまであった。

年次別概況

昭和42年

鳥取県WL協会設立(4月1日)。初代会長に岸秀正(故人、当時鳥取西工業高校校長、理事長に福嶋章一(当時同校教諭)、理事4名の役員と選手で発足し、鳥取県体育協会に加盟(6月)。弱体ながら組織体制ができあがった。また、鳥取西工業高校に設計から施工まで職員、生徒が一体となって作ったWL練習場が完成(10月)。

成年競技者は、その年鳥取西工業高校を卒業したばかりの数名、少年競技者は同校の部員22名であった。

こうして、鳥取県WL協会の基盤ができあがった。

この年、県民体育大会WL競技に成年1名、少年4名出場。県高校総体WL競技に10名出場した。

昭和43年

中国高校WL選手権大会(山口県)に福嶋章一が率いる平尾章二、下田裕、田中日出夫、竹内達夫、尾崎修一等7名が本県選手として初出場。

また、中国・九州大会に平尾章二が出場。県民体育大会に少年5名が出場した。

昭和44年

県民体育大会に成年2名、少年4名出場。県高校総体に12名が出場した。

昭和45年

第2代会長に椿公爾(当時鳥取西工業高校校長)就任。

歴代会長

初代 岸 秀正(昭和42年～)

第2代 椿 公爾(昭和45年～)

第3代 大西 正巳(昭和48年～)

第4代 吉田 遼男(昭和52年～)

県民体育大会に成年2名、少年4名出場。県高校総体に12名が出場した。

昭和46年

前年くらいの活動状況であった。

昭和47年

鳥取県高体連にWL専門部が設置され、初代部長に椿公爾(当時鳥取西工業高校校長)、委員長に福嶋章一が就任。福嶋や選手達は全国高校総体出場の夢を描きながら日々の練習に励んだ。

昭和48年

第3代会長に大西正巳(当時鳥取西工業高校校長)が就任。

昭和49年

本県選手が全国高校総体(福岡)に初出場を果たした。福嶋章一率いる秋田和夫、谷口光之、中垣悟、田中明である。

昭和50年

谷口正幸、徳山実等成年が国体初出場をめざして練習に励んだ。入江達雄が全国高校総体に出場し、全国大会出場が身近かな状況となっていた。

昭和51年

本県成年選手の谷口正幸、徳山実、入江達雄の3名が国民体育大会(第31回佐賀国体)に初出場。

西川祝朗(現渡辺)が米子工業高校に赴任し、同好会を発足させた。これまで県下では鳥取西工業高校1校であったが、同校の発足により2校体制となり、普及の第一歩を歩んだ。

この年、初の2校による新人戦大会を開催した。しかし、その後米子工業高校の同好会は西川の転勤により3年間で活動が途絶えた。

昭和52年

第4代会長に吉田遼男(当時鳥取県議会議員)就任。

本県において初めて中国WL選手権大会(第8回)を鳥取市で開催(8月)。人、物、資金の乏しい中で吉田会長、福嶋、谷口、徳山等の尽力によりこの大会を開けるようになり、ようやく中国各県と肩をならべられるまでになった。本県の少年選手の沢亨が国民体育大会

(第32回青森)に初出場した。

昭和53年

特に目立った事柄はないが、成年、少年選手達は全国、県内大会の7大会に出場した。

昭和54年

昭和60年「わかとり国体」開催をめざした活動が本格化。6月には成年競技会場となった岩美町民体育館が完成。鳥取西工業高校の松本和徳がWL研修のため中京大学に内地留学。

昭和55年

岩美町民WL練習場(85㎡)が完成し「わかとり国体」の選手強化に大きな効果を生み、地域住民のWLに対する理解と関心が高まった。同大会をめざし鳥取西工業高校と岩美高校が高校体育部強化指定校になった。また、岩美中学校も中学強化指定校になり、高校、大学を通してWLに専念した入江達雄が教鞭をとった。福嶋章一の発案により、当時としては珍しい全国に先駆けての中学生選手強化を実施。前述の練習場で岩美中学生と岩美高生の選手を指導した(このとき岩美高校に部はなかった)。

昭和56年

岩美高校に、大学でWLに専念した前川章三が赴任し、同校にWL同好会を発足させた。これによって県下に再び2校体制ができ、陣容と選手強化がアップした。一方、中学生はハイクリーン大会を初めて実施して6名が会場。県高校新人戦には高校生に混って7名の選手が会場し、中学生強化が入江達雄の指導の下に本格的に始動した。第12回中国WL選手権大会を岩美町で開催。

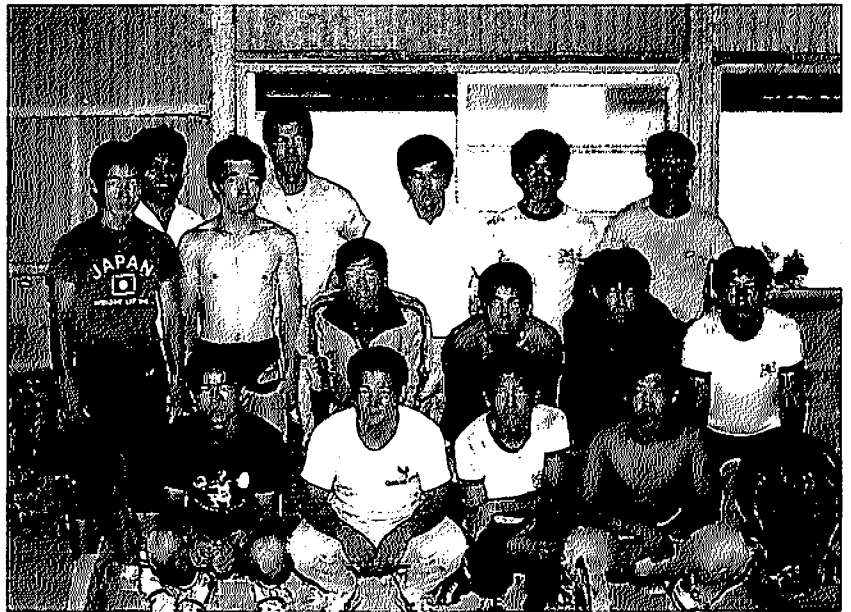
昭和57年

中学生選手達は、県内大会のいずれにも本山雅志、田中尚樹、竹内浩、大竹賢二、橋本慶之等高校生選手と合同で競技するようになった。

中学の入江達雄、高校の福嶋章一、前川章三の中高連携の強化指導陣の下で、西本宣充、谷口和宏、玉川弘、博田忠宏、中村治生、岡島勝行、池平充昭の中学生選手が確実に成長していた。

昭和58年

鳥取県選手強化対策本部(当時)の事業として「わかとり国体」において優秀な成績を収めるため、中京大学監督加藤正雄氏をアドバイザーコーチとして招へいし、再々強化合宿を実施した(昭和60年まで)。後にその国体において、加藤氏の指導成果が大いなる結果で具



岩美町練習場完成記念

現することとなる。

鳥取西工業高校にWL専用練習場が増改築(8月)され選手養成が加速された。こうした盛り上がりの中で、第38回群馬国体において本山雅志(75kg級・鳥西工)が3位に入賞。本県のWL少年選手の国民体育大会における初めての入賞者となった。

昭和59年

第21回全日本社会人WL選手権大会、第12回全日本実業団選手権大会兼第2回全日本マスターズWL選手権大会を岩美町民体育館で同時開催(11月)。「わかとり国体」開催と成功にむけてリハーサルし県内役員・補助員の養成を兼ねた。本協会としては初めての全国規模の大会開催であった。なお、全日本社会人で入江達雄(60kg級)が2位に入賞した。

第15回中国WL選手権大会を同会場で開催(8月)。

日本WL協会より三宅義信氏を迎えて記念講演会を開催した。大勢の町民が参加して大盛況となり、国体ムードが高まった。

西本宣充(82.5kg級、鳥西工)が高校2年生ながら全国高校総体(秋田)と国民体育大会(奈良)に連続優勝。

昭和60年

日中友好全国本部常務理事であった吉田達雄会長が日本WL協会、中国拳重協会へ要請し、6月に日中友好WL競技大会を岩美町民体育館で開催。日本と中国の一流選手20名が競技して観衆に深い感銘をあたえ、WLムードは一段と高まった。「わかとり国体」のために、滋賀県出身で鳥取西工業高校で教

鞭をとりながら選手として練習を重ねていた山田一則が会場して活躍した。第40回国民体育大会「わかとり国体」WL競技を「明日に向かってはばたこう」のスローガンのもと、岩美町民体育館(成年)と岩美中学校体育館(少年)で開催(10月)。本県は監督入江達雄(成年)、前川章三(少年)、コーチ山田一則。成年選手は大竹賢二、田中尚樹、本山雅志、山田一則。少年選手は博田忠宏、谷口和宏、西本宣充であった。地元岩美町の絶大な協力と、同町を中心とした生え抜きの選手達の活躍によって少年勢が総合優勝。WL団体総合2位(天皇杯得点12点)であった。西本宣充は少年90kg級で日本新記録で優勝し、開催地の選手として一躍脚光を浴び地元のヒーローとなった。また、谷口和宏(82.5kg級)も金メダルに輝いた。

国民体育大会という大きな大会を成績・運営面等成功裡に終えることができたことは本県協会員にとって誠に感慨深いものがあった。そして、国体開催は中嶋政幸(現理事長)、寺谷和範(現理事)が加わるなど組織が飛躍的に充実し、また設備も整い「人と物」がかけがえのない財産として残り、有意義なものであった。

西本宣充は前年に続いて全国高校総体・国民体育大会に2年連続優勝した。渡辺悦朗が「渡辺ジム」を設立。船田知典(現小髪)、遠藤一郎等と共に高校生を含めて12名で発足。練習場(7.5坪)の建設やバーベルを自費で賄い、県西部の拠点として活動を続けながら、後々国体選手等を輩出することとなった。

玉川弘(60kg級、鳥取西工業高校)が全国高校総体で6位入賞。

昭和61年

西本宣充選手後援会設立(8月)。後援会長澤徳次郎岩美町町長等のご尽力により町、県等多くの方々に支援の輪が広がり、後に西本が出場した'92バルセロナ・'96アトランタ両オリンピックの支援体制の基盤が出来た。

なお、西本はこの年WLで名高い日本体育大学に進学した。

渡辺悦朗の働きかけにより米子東高校にWL同好会が充足した(しかし、昭和63年までの3年間の活動に終わった)。

昭和62年

第1回鳥取県高校春季大会を開催した。これは高校生の競技力向上を目的として福嶋章一が発案。4月に実施し13名の選手が出場した。

全国高校選抜大会(第2回埼玉)に本県選手として中村治生が初出場。

昭和63年

鳥取県高校春季大会の名称を鳥取県WL競技春季大会と改め、成年も参加する大会として開催。

第19回中国WL選手権大会を鳥取市で開催した。

平成元年

吉田達男会長が参議院議員に当選(7月)。

吉村昌洋が国民体育大会(少年67.5kg級、鳥西工)で8位入賞。

平成2年

第4回鳥取県WL競技春季大会において選手に意欲を起こさせるため「福嶋杯」を設け、年度を通して他の模範となる選手を表彰することになった。

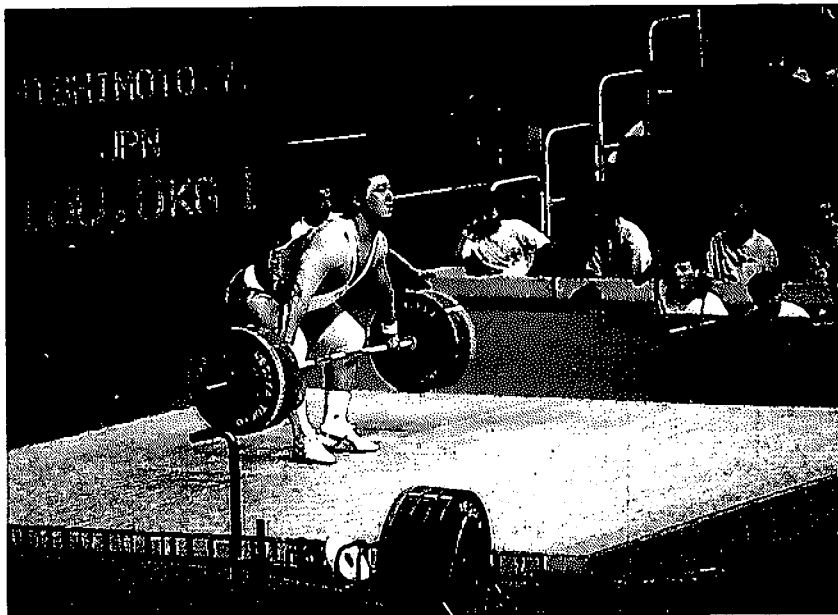
この年、西本宣充は大学を卒業し、郷里に帰って鳥取県教育委員会に勤務しながら選手活動を始め、第50回全日本選手権大会兼第11回アジア大会選考会で優勝し、続いて第11回アジア大会(中国北京市)に90kg級日本代表選手として出場。同選手後援会、本協会が主催して激励会を開催し、県、町等の関係者多数が激励。澤徳次郎後援会会長、吉田達男会長等20名の応援団が会場にかけつけた。

平成3年

国民体育大会の少年52kg級で田中理規が6位入賞。

平成4年

西本宣充が第25回オリンピック大会日本代表選手最終選考会100kg級でT365kgの日本新記録を樹立。これにより'92バルセロナ・オリンピックに日本代表選手として出場し、またも日本新



西本宣充がバルセロナ・オリンピック100kg級で8位入賞

記録で見事8位入賞を果たした(S165kg、J207.5kg、T372.5kgで、いずれも日本新記録)。

西本はもとより、関係者にとって長年の夢が実を結んだ輝かしい一瞬であった。会場の西尾邑次県知事、田淵康久県教育長、澤徳次郎後援会会長、吉田達男会長等20名の応援団は歓喜の渦につつまれた。西本は鳥取県スポーツ顕彰を受賞し、県知事をはじめ多方面の多くの方々から祝福された。昭和60年「わかとり国体」の“人の遺産”が見事に開花し結実したものであった。またこの年、升田友也(67.5kg級、鳥取西工業高校)が全国高校総体(宮崎)・国民体育大会(山形)・全国高校選抜大会で3連覇を達成。

渡辺悦朗(90kg級)が全日本マスターズ選手権大会(徳島)に本県選手として初出場。山根哲也が国民体育大会で少年64kg級に8位入賞。

第23回中国WL選手権大会を鳥取市で開催。

平成5年

吉田達男会長(参議院議員)が農林水産政務次官に就任。

第65回世界選手権大会(オーストラリア)に西本宣充(99kg級)が8位になった。

全日本マスターズ選手権大会(愛知)で渡辺悦朗(91kg級)が優勝。

平成6年

日本WL協会の三宅義行氏を迎えて岩美町で中国ブロック審判講習会を開催し、各県の審判員が受講した(3月)。小山隆次(岡山県出身)本県選手として活動を始め、後に国民体育大会・全日本

選手権大会等で活躍。

「平7全国高校総体」開催にむけて松本和徳が鳥取西工業高校より開催地の岩美町実行委員会へ出向(平成7年8月まで)。

平成7年

鳥取県は、昭和60年「わかとり国体」開催を記念して、10年目のこの年に全国高校総体を誘致して開催。平成7年度全国高校総合体育大会WL競技を同国体の開催地となった岩美町で開催。

「集え若人はばたけ未来へ」のスローガンのもと全国各地から137校371名の選手が出場して覇を競った。本県からは、総監督入江達雄、コーチ上原正樹、鳥西工監督西本宣充、選手明石圭市、谷口浩二。岩美高監督三好徹、選手山内健太郎、山崎聡。米子高監督西村寿之、選手安達一博が参加。

本県選手は健闘したが、残念ながら入賞に至らなかった。

大会は関係各方面の団体の方々のご指導とご協力により成功裡に終えることができた。

第67回世界選手権大会(中国広州)に西本宣充(99kg級)が8位になった。

平成8年

吉田達男会長が岩美町町長に就任。併せて西本宣充選手後援会会長に就任。西本宣充(99kg級、鳥取西工業高校教諭)が第28回アジア選手権大会(千葉)においてS167.5kg、J210kg、T377.5kgのいずれも日本新記録で4位に入賞。

日本WL協会はこれをもって西本を'96アトランタ・オリンピック日本代表選

手として出場を決定した。

西本はこれで'92バルセロナ・オリンピックに続いて'96アトランタ・オリンピックと連続出場の栄誉を果たした。

県、町等が主催して激励会を開催した。これに日本WL協会会長林克也氏が来県し、激励のことばを述べた。

大会会場には県、町、県協会の関係者20名の応援団がかけつけて西本の連続入賞を祈った。西本は健闘したが、連続入賞の壁は厚く、トータル355kgで15位であった。

鳥取県で今日までに各競技においてオリンピックに出場した選手は19名であるが、県内在住者で2回出場した者は彼だけである。

西本は本県協会30年の歴史の中で最も傑出した選手であり、また鳥取県のスポーツの歴史の中でも優れた業績を残した人物である。

鳥取県と岩美町は彼を称えて顕彰した。

第27回中国WL選手権大会を岩美町で開催。

一級公認審判員資格を中嶋政幸が受験(10月)し、本県協会に一級審判員誕生も間近い。



アトランタ・オリンピック大会会場で、西本(中央)選手を囲む鳥取県応援団

〈現役員〉

会 長	吉田 遠男		
副 会 長	福嶋 章一	松本 和徳	
理 事 長	中嶋 政幸		
理 事	寺谷 和範	霜田 修	
	渡辺 悦郎	須崎 昌裕	
	入江 達雄	前川 章三	
	尾崎 俊文	田中 尚樹	
	竹内 浩	三田 賢治	
	西本 宜充		

島根県

事務局 〒693 島根県出雲市下横町950番地 出雲農林高等学校内
寺本 寛夫 TEL0853-28-0321

〈沿革〉

協会創立以前

昭和30年代、ウエイトリフティング競技は県内スポーツ界の未普及種目のひとつであった。その頃、県内ではフェンシング、テニス、ハンドボール、ヨットなどに相次いで連盟や協会設立の動きが出ていた。そうした中、島根県教育委員会と島根県体育協会は、昭和40年に松江工業高校でウエイトリフティング競技の講習会を開催した。前年に開催された東京オリンピックでフェザー級の三宅義信選手が金メダルを獲得したこともあり、講習会への関心は高く、高校生、一般の柔道や陸上の投てき種目の選手など約30人が集まった。講師は、陸上ハンマー投げの選手で、大学時代にウエイトトレーニングの経験がある安井清三と、やり投げの選手だった今岡進が選ばれ、東京で指導を受けて帰り、理論と実際にバーベルを使っての実技を指導した。この講習会が本県におけるウエイトリフティング競技導入の第一歩であった。

協会創立に至る経緯

前述のように、ウエイトリフティング競技の県内への導入の動きが活発になった背景には、島根県に国民体育大会を誘致しようという機運が高まってきたことがあげられる。

島根県教育委員会と島根県体育協会は、この講習会の開催をきっかけとして、当時米担ぎ競争(担袋大会)が盛んだった出雲市農業協同組合の組合長・吉田慶久と、同組合との関係が深い出雲農林高校の校長・瀬尾正三に協力を得て、農青連ウエイトリフティング大会の開催や出雲農林高校への部の設置にこぎつける運びとなった。昭和41年のことである。同校では、体育科で陸上競技が専門の松井初雄教諭を部の顧問とし、創部直後の大分県での国民体育大会に県勢として初めて2人の選手

を送った。同校のやり投げの選手であった永瀬美徳と、練習を積んできた出雲商業高校の伊藤行正である。急な大舞台への出場であり、しかも当時のこと、今のような立派なユニフォームがあるわけではなく、とりあえずランニングシャツに水泳パンツという姿での出場であった。成績は期待すべきものではなかったが、こうした真剣な取り組みが大会関係者の好感を呼ぶとともに、協会設立へとつながっていった。

翌昭和42年4月、初代会長に吉田慶久、理事長に松井初雄のコンビで島根県ウエイトリフティング協会が発足した。

協会創立のこうした経緯から、我県高体連とは表裏一体の関係にあり、以後の記述にも多々高体連の出来事を載せることとなる。

〈年次別概況〉

昭和42年

協会発足の記念すべき年であったが、練習用具もなければトレーニング方法も分からないという手探り状態でのスタートであった。そんな中、幸いにも東京オリンピックで使用されたバーベル基の払い下げを受けることができた。出雲市農業協同組合の援助で白木のプラットホームや手製のバーベルを作り、競技に取り組み形を整えることができた。

一方、技術の習得は先進校である岡山県の水島工業高校へ出雲農林高校が出掛けて、指導を受ける形で取り組むことにした。

協会の歩みの第1歩であった。

昭和44年

県外出身者で競技経験のある方が、県内赴任の縁によって指導して下さる機会が出来、競技力の向上も徐々にすすんできた。思いもよらぬ援軍であった。

昭和45年

出雲農林高校の定時制に続き、全日制

歴代会長

初代 吉田 慶久(昭和42年～)

第2代 板垣 邦彦(昭和55年～)

第3代 佐々木雄三(昭和61年～)

にも部への参加を認め、これによって協会組織の底辺の拡大が一層すすむことになった。

昭和46年

県勢として初めて高校生の全国大会入賞者を出すことができた。全国高校総体Fe級のP種目3位である。協会創立以来、必死で選手の育成に取り組んできただけに、これは協会あげての、大きな大きな喜びと将来への励みとなった。

昭和47年

出雲農林高校創部以来6年目で、松江工業高校と浜田高校に相次いで部及び同好会が設置され、競技力の向上と組織の充実が期待が高まった。

昭和48年

7月、第37回国民体育大会開催申請県として決定を受け、同年12月にウエイトリフティング競技開催予定地として出雲市が決定した。

これを受けて早速、会場の整備、器具や審判員、各係員などの養成と輸送、宿泊、駐車場の確保等、年次計画の策定に着手した。

昭和49年

松江西高校が4校目の部創設校となり、協会のすそ野がますます広がりをみせると同時に、競技力も着実に上がり、高校全国大会での活躍が続いた。

昭和52年

この年に開催された青森県での国体において、本県社会人として初めて入賞者を輩出した。52kg級7位であった。5年後の我が県での国民体育大会開催に向けて明るい話題となった。

昭和53年

山形県鶴岡市で開催された全国高校総体において、本協会の創立以来の夢であった全国優勝を、浜田高校の加納修が実現してくれた。67.5kg級でJの最終試技を10kgアップしての大逆転優勝であり、喜びも一層大きく感じられた。協会創立12年目の快挙であった。同年秋の、長野県で開催された国民体

育大会少年の部では、総合5位という過去最高の成績をあげた。

昭和55年

昭和57年に本県で開催される「くにびき国体」の役員養成のための講習会等が活発に催されるようになった。

昭和56年

「くにびき国体」のリハーサル・イベントとして、全日本社会人選手権大会兼全日本実業団選手権大会を出雲市の出雲農林高校体育館で開催した。

大会運営にあたっては、日本ウエイトリフティング協会の指導のもと、出雲市及び出雲農林高校の協力をいただき、各係員の平素の打ち合わせの成果により、スムーズな運営ができ、本番に向けての自信を深めることができる大会となった。

技術面では、初日の社会人競技で56kg級と60kg級でそれぞれ4位、67.5kg級で2位、75kg級で3位など輝かしい活躍を見せ、「くにびき国体」への大きな期待を抱かせた。

この他、指導者や競技役員を兼ねて、日本ウエイトリフティング協会より東京オリンピック・フェザー級金メダリストの三宅義信氏の講師派遣をお願いし、「根性論」をテーマにした貴重な講演や東京オリンピックでの試合談などを聞き、有意義な機会であった。

昭和57年

いよいよ本番、本県で開催される初めての国民体育大会「くにびき国体」の年である。

本大会の成功を目指して、長期の計画のもと役員、選手が一丸となって頑張ってきた。環境面では出雲市をあげての美化活動に取り組み、会場となる出雲農林高校をはじめ周辺校の協力を得て花づくりに取り組むなど、市、学校、協会と高体連が一体となって努力してきた。その成果が本大会での立派な大会運営となってあらわれ、数多くの記録を生み、大盛会の思い出深い大会となった。

運営面だけでなく競技面でも成年の健闘に加え、少年の全員入賞による総合6位という活躍で大きな成果を残すことができた。

昭和58年

「くにびき国体」の残した財産は偉大であった。この年に行われた全国高校総体と国民体育大会において、我が県としては初の2冠選手が誕生したのである。国体開催を通して、競技力の向上対策や選手確保、管理のあり方など様々な貴重な体験を積めたことを改め



くにびき国体第1競技場

て有難く思う。

昭和59年

この年、鳥取県で開催された国体において少年の部で2年連続の優勝者を出した。

昭和60年

「くにびき国体」から新しい強化対策計画へと移行を図る。

昭和61年

本県にとっては5校目となる大東高校ウエイトリフティング部の設置がなされ、「くにびき国体」後、ちょっと息抜き状態の中にあって、明るい話題となった。

昭和63年

指導者の異動や退職などによって高校の強化体制がやや弱まった中、高体連、協会、OBが協力し合って指導のバックアップにあたり、3人目の高校全国優勝者を出した。

平成2年

成年強化育成の一環として取り組んでいた大学生リフターづくりが順調にすすむ中、法政大学2年の河井健二が本県選手として初めて、ドイツで開催された第17回世界ジュニアウエイトリフティング選手権大会54kg級で銅メダルを獲得した。

同年、第1次強化5ヶ年計画が県より示され、新たな強化計画実施に入った。

平成6年

108kg級で本県初の日本高校記録樹立者誕生。4

人目の全国優勝者となる。

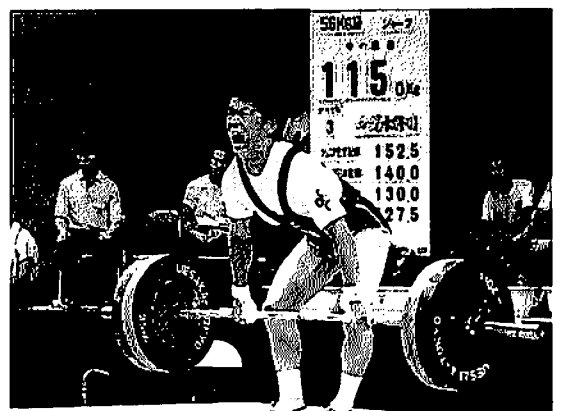
愛知県で開催された国体成年の部54kg級で優勝者を出す。

平成7年

県の第二次5ヶ年計画に基づき、選手強化と組織拡充に取り組む。

〈現役員〉

顧問	石飛 博	波部 幸世
	石飛 満	松井 初雄
会長	佐々木雄三	
副会長	齊木 充之	中村 晴洋
	吾郷 征三	大屋 俊弘
	万代 宜雄	波部 和夫
	奥田 利晃	
理事長	市場 義延	
副理事長	小川 高志	
理事	小川 弘知	田原 良英
	光田 拓雄	日浦 哲夫
	花田 祥之	横山 孝三
	山崎 雅彦	原 正
	福岡 啓三	景山 哲彦
	荒木 修司	内藤 誠一



4位入賞した荒木修司のJ115kg

岡山県

歴代会長

- 初代 多賀 安郎 (昭和22年～)
- 第2代 三宅 太郎 (昭和29年～)
- 第3代 千田 亀進治 (昭和49年～)
- 第4代 板谷 誠一 (昭和55年～)
- 第5代 田中 博文 (昭和58年～)

事務局 〒703 岡山県岡山市土田290-1 東岡山工業高等学校内
長谷 章一 TEL.0862-79-0565

〈沿革〉

協会創立以前

岡山県の重量挙げの歴史は昭和10年に始まる。当時岡山市在住の朴章鎬氏が岡山市に拳闘クラブを開設しその中に東洋体育研究所を設け、「人体改造垂鈴運動」と称し全身の筋肉を鍛練することを目的として始めたものである。いわゆるフィットネスクラブの前身といえる。

当時同研究所に所属していた岡山県協会の前会長板谷誠一(現名誉会長、倉敷市在住)が倉敷市に朴と共に倉敷支部道場を置き、コンクリートで手製バーベルを作り、各種のウエイトトレーニングを行ったことに由来する。

協会創立に至る経緯

第二次世界大戦の影響で数年の休止期間を置きながらも、終戦とともに板谷及び実弟で現吉備国際大学福祉学部長窪田登らが、倉敷支部道場を再建し活動を再開した。

競技会への初参加は昭和22年11月に石川県金沢市で行われた第2回国民体育大会兼全日本選手権大会に岡山県代表として窪田登を送りだし、強豪井口選手(東京)、堤選手(長崎)を相手によく競いみごと3位に入賞した。そして、翌昭和23年10月、福岡県福岡市で行われた第3回国民体育大会兼全日本選手権大会では、同じく窪田がL級2位となり、ますます競技熱を盛りあげた。しかし、全国大会に選手を送り出すものの、まだ、岡山県には正式な組織がなく、昭和24年7月になって、日本重量挙げ協会に正式加盟し、日本重量挙げ協会岡山県支部として発足した。初代支部長に多賀安郎、初代理事長に板谷誠一が就任した。

支部発足に当たり翌8月、井口幸男先生を郷土岡山に招き、倉敷市で模範演技会を行った。当時を振り返り、その様子を板谷名誉会長(倉敷市在住)

は、「会場をうずめた観衆は、初めて見る同氏の隆々たる筋肉の躍動美に魅せられ、演技終了後、井口選手に万雷の拍手を送り讃えた」と語られている。そして翌9月、岡山市において初めて県支部主催の競技会を開催した。その時の様子を板谷は「屋外に石灰で4メートル四方の白線をひき、器具も個人所有の物を借り、選手同士で器具をつけあい、また、判定は主審一人で赤青の手旗で行う実に簡素な試合であった」と主審にコールにと一人で競技役員をこなされた思い出も語られた。

その第4回国民体育大会兼全日本選手権大会岡山予選会に出場した15名の選手の内5名を岡山県代表として、東京都であった本大会に出場させ、F級丸山7位、B級安延3位、Fe級丸山8位、L級窪田優勝、M級武繩は7位となった。それが、岡山県協会初の代表チームである。

その後、岡山県支部は着実に体制を整え、昭和26年4月に、日本協会岡山県支部は正式に岡山県重量挙げ協会と改称され、会長に多賀安郎を再任し協会の体制を整え現在に至っている。

〈年次別概況〉

昭和20年代

昭和26年10年、東京でハワイの2世チームを招き日米対抗競技会が行われ、岡山県から日本代表として窪田登が出場し、エメリック・石川選手に敗れ2位となった。

昭和27年10月福島県平市で行われた第7回団体兼第12回全日本選手権大会に関口、丸山、宇野シ、西尾、窪田、宇野テの6選手を派遣した。L級の窪田が日本記録を樹立し、みごと優勝した。また、団体戦においても見事3位に入賞し、選手層の厚さを全国に見せつけた。競技会後に行われた第1回全日本ボディ・コンテストにおいても、窪田が日頃のトレーニングの成果を十分に発揮し、初代のミスター日本の栄冠を手にした。

昭和28年より、全日本選手権大会、団体が2試合に分離開催されるようになり、6月に大阪市で行われた全日本選手権においては、岡山県出身選手が活躍し、9名の入賞者を出した。なかでも、L級窪田、B級丸山の優勝は特記



岡山県協会創立のメンバー

される。また、10月愛媛県で行われた国体は、エース窪田を欠きながらもよく頑張りが団体で5位入賞を果たした。昭和29年は国体のブロック予選が導入され、6月の中国地区予選会では他県に実力の違いを見せつけ、団体1位で通過し、8月の北海道小樽市で行われた第9回国体に、中国地区代表として選手を送り出し、みごと団体3位となり中国地区の面目を保った。また、この年より高校選手権大会が設けられ、第14回全日本選手権大会と合わせて徳島県徳島市で開かれた。

第1回高校選手権においては、F級浅沼5位、B級貝原4位、Fe級山口2位、同級、諏訪3位、M級藤沢優勝と、岡山県として輝かしい活躍の跡を残した。特に藤沢はM級において初代チャンピオンの名を残した。

同年、岡山県として初めての国際試合への派遣を行い、5月フィリピン・マニラ市で行われた第2回アジア競技大会に窪田を送った。

昭和30年代

昭和30年代に入り本県の重量挙げ競技は漸次隆盛した。また、この年より岡山県を離れた窪田が提唱するウエイトトレーニングが全国に普及した。

昭和30年、神奈川県川崎市で行われた第10回国体では2つの特筆すべきことがある。1つは、高校生ながらM級に出場した藤沢が優勝をかけて一般の島田選手(神奈川)と接戦を続けている時、天皇、皇后両陛下がご来臨になり、その活躍を興味深くご覧になられたことであり、岡山県協会にとって忘れることのできない栄誉な事柄である。結果としては、Jで日本記録を樹立しながらも2位と涙を飲んだ。もう1つは、神奈川で出場した選手の内、2名までもが岡山県出身者であり、団体順位、1位神奈川、2位岡山を含めて考えれば国体で岡山県選手が大活躍した年ともいえる。

昭和31年、国体の前哨戦を兼ねて倉敷市に法政大学を招き、オール岡山と対抗戦を行い、法政大学の勝利に終わった。しかし、兵庫県尼崎市で行われた第11回国体では、その成果を十分に発揮し、丸山優勝、藤沢2位、団体でも5位入賞となった。

その年、昭和37年の岡山国体の誘致が正式に決定された。

同年の10月に開催された、メルボルン・オリンピックに岡山県より山口隆弘が参加し、岡山県協会として初のオリンピック選手が誕生した。

また、丸山、山口、藤沢、3選手の日本記録も公認された。

昭和32年は、国体開催に備え、日本協会より井口幸男先生を招き、倉敷市において審判講習会を行った。その年の東京都で行われた第17回全日本選手権大会では、丸山選手がFe級において優勝した。また、第4回高校選手権においては、Fe級に出場した吉田がP競技に日本高校記録を樹立し、優勝した。昭和33年5月、東京で第3回アジア競技大会が行われ窪田がLH級に出場し2位となった。岡山県の関係選手が初めて国際大会で表彰台に登り、栄光の足跡がまた一つ加わった。

また、この年より高校の全国組織結成の気運が高まり、翌34年ウエイトリフティング競技の専門部を結成し、全国高校体育連盟に加盟した。その年の第6回高校選手権を全国高体連専門部会主催のもと岡山県金光町で開催した。名実共に最初の全国高校総体ウエイトリフティング競技を開催できたことは我が県の誇りであり、また、岡山県より参加した選手のうち、B級荒木、L級小川が堂々の優勝をとげ、開催県としての面目を保った。

昭和35年の国体は一般、高校の2部制となり、高校の部については、予選方式の変更により中国、九州地区から2県の代表枠となったが山口県との接戦のすえ第1代表を手に入れることができた。本大会は、熊本県宇土市で開催され一般F級の吉田の優勝を含め団体3位になった。

また、この年にイタリア・ローマ市で行われたローマ・オリンピックに、監督として岡山出身の井口幸男先生、LH級の選手として窪田の2名を送り出すことができた。あと2年に迫った岡山国体の為に、この年より高校新人大会を新設した。

昭和36年は、高校生が低調であったが中国九州地区国体予選会ではよく戦い、代表権を得ることができた。秋田県で行われた本大会では一般の2選手が失格したが、そのアクセントにもめげず、L級山口、LH級窪田の優勝を含め、残りの選手がよく戦い、団体3位に入賞することができた。

昭和37年、この年はいよいよ岡山国体の年であり、協会としては選手強化と施設、競技運営の研究に没頭した。7月に栃木県宇都宮市で開催された高校選手権において6名の上位入賞者を出し、国体への見通しを持つことができた。

10月22日より5日の熱戦の幕は切って落とされた。初日、高校F級板谷優勝、高校B級三宅優勝、2日目高校Fe級貞利6位、高校L級佐藤2位、高校LH級小橋3位と活躍し、高校総合2位となった。一般も気を吐き、一般F級吉田ト4位、一般B級吉田カ6位、一般Fe級藤原2位、一般L級山口2位、一般LH級藤沢ユ4位で団体3位、総合2位となり、開催県の面目をたもった。また別の意味で注目されるころは、世界記録を含め106個もの新記録が樹立され、いかに会場施設、競技運営がスムーズに行われたかを物語っている。

また、この年は国際大会に2名の選手を送り出した。Fe級藤原はモスクワ市長杯、アジア競技大会に派遣されたが、アジア大会については政治問題のために出場を断念せざるをえなかったのが残念である。また、L級山口は、世界選手権の日本代表としてオーストリアに遠征した。

翌38年は前年に残した好成绩に続けと、各選手が頑張りが、高校選手権では5人の上位入賞者を出したが、その後の国体では高校は団体3位を確保したものの、一般の登録問題もあり総合では6位に甘んじた。

この年より新旧交替の時期に入り岡山県のチーム編成も学生主体の若手へ変わっていった。翌39年は東京オリンピックの年に当たり、岡山県より藤原が最終予選に臨んだが怪我のため惜しくも涙を飲んだ。第19回国体では高校選手権に続き高校M級渡辺が優勝したが、団体では入賞を逃した。

昭和40年代

昭和40年にはいり角南照がM級P競技において日本高校記録を樹立し、また、L級藤原もP競技において日本記録を樹立した。その年の国体では両選手の活躍もあって8位に入賞することができた。

昭和41年には角南保が高校選手権LH級でみごと優勝したものの国体地区予選会において高校は代表権を取ることができず、一般だけの苦しい戦いとなり入賞を逃した。

昭和42年は国体において前年逃した高校の代表権を取り返し、また、大学生の活躍で団体総合5位に食い込むことができた。岡山在住選手に以前のようなエースが不在である。

昭和43年は角南保の活躍が目立った。10月の国体では一般M級においてJr世界記録を樹立し、優勝した。

昭和44年は広島県府中市で第1回中国選手権大会を予定していたが、広島、岡山の2県しか参加がなく両県の対抗戦を行い、岡山県が勝利した。8月の高校選手権において新設されたMH級に出場した東山は、みごと優勝し初代のチャンピオンになった。また、選手についても順調に調整でき、10月に長崎県で行われた国体では、一般B級平井がS競技においてJr世界記録を樹立した。一般M級角南保優勝、高校L級妹尾が優勝と気を吐き、団体5位に入賞することができた。また、年末に行われた全日本社会人大会においてF級山下が優勝し、団体でも所属する三菱石油が団体で6位に入賞した。

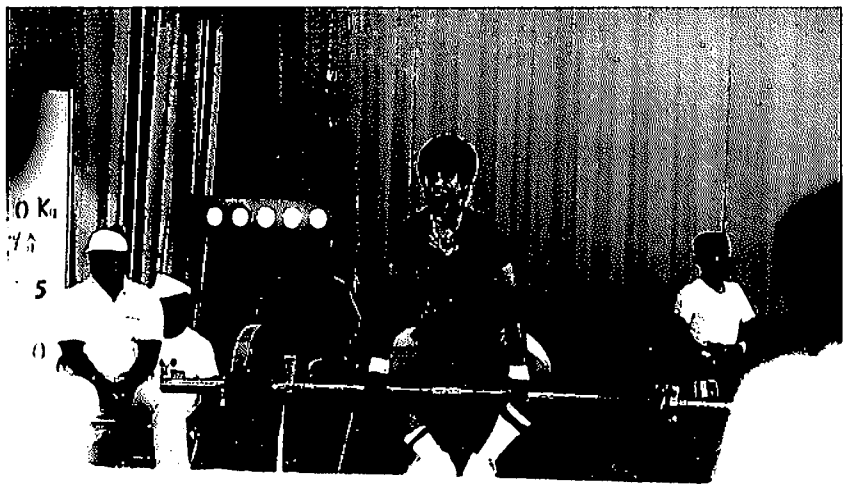
昭和45年8月和歌山県串本で行われた高校選手権において、倉敷工業高校は団体2位となり、岡山県の高校としては初の団体入賞となった。また、角南保は9月アメリカで行われた世界選手権に出場した。前年度中止となった第1回中国選手権大会も岡山、広島、鳥根の3県の参加があり、岡山で開催した。この年は、高校の国体地区予選で惜しくも代表権を取ることができず、一般だけの苦しい戦いとなり、一般では5位となったが総合では入賞を逃した。

昭和46年は、岡山県にとって大きな痛手となった年である。角南保の愛知県への移籍があり、岡山県の戦力が大きくダウンした。しかし、和歌山県であった国体では一般のみのエントリーとなったがよく戦い一般5位、総合でも8位入賞することができた。その夏に徳島県で行われた高校選手権において、F級岩崎が優勝し、団体戦でも水島工業高校が5位と健闘した。

翌47年の国体も同様の布陣で臨んだが一般6位となり総合入賞は逃した。

昭和48年は岡山県にとってもう一つの大きな痛手となった年である。平井の三重県への移籍である。後の、アジア大会優勝、モントリオール・オリンピック銅メダリスト、今思えば岡山県の重量界、いや岡山のスポーツ界の損失の観さえする。この年よりP競技が国内で廃止になった。国体ではH級の杉本が一人で気を吐き優勝した。

昭和49年11月、三宅前会長叙勲、主力選手の流失で暗い協会内の久々の吉報である。また、4月より三宅俊次が母校である倉敷商業高校に赴任し、後進の指導に当たった。協会にとっては、高校で初めて専門的な指導者を迎えたことになる。



昭和52年、岡山高校総体での村木（現・岩田）選手

昭和50年代

昭和50年代前半は岡山県協会として、低迷した時期であった。高校にも一般にも目立った選手がおらず混沌とした時期である。しかし、昭和52年は協会が、始まって以来の大事業を開催した。6月の全日本選手権大会は、新装なった倉敷中央体育館を会場に日ソ友好杯も兼ねて行い、来日したソ連選手の強さに圧倒され、また岡山県出身選手の活躍に歓喜し、選手の日本記録樹立に貢献することができた。

8月の高校選手権を高梁市で行い、56kg級に出場した村木は優勝を期待されながら3位に終わり、他2名の入賞者を出せずに終わってしまったことは、開催県としては誠に不本意なことと惜しまれる。

10月に青森県で行われた国体で村木は少年56kg級で優勝し全国高校総体の雪辱を果たした。

昭和53年は、高校選手権においては入賞者ゼロと不名誉な年であった。国体においては少年は全員8位以内入賞を果たしたものの、成年がふるわず低調であった。この年ギリシャで開催されたJr世界選手権に村木が参加した。

翌54年も低調ではあったが国体に参加した少年は全員入賞を果たした。特に75kg級に出場した多田は2年生でありながら3位以内に入賞し、大器の片鱗をうかがわせた。

昭和55年は8月の高校選手権において82.5kg級の多田が大会記録を樹立し、優勝した。10月の国体では少年75kg級優勝の多田を始め、少年が原動力となり久々の総合8位入賞を果たした。一

般も若手の台頭が著しく、牧野、村木が全国大会上位進出を感じさせた。この年の夏、村木はモントリオールで開催されたJr世界選手権に参加をした。昭和56年、群馬県で開催された全国高校総体において82.5kg級の山本が優勝した。10月に滋賀県で行われた国体においては上位進出が望まれたが、高校生の失格により涙を飲む結果になった。

昭和57年、この年の全日本選手権大会の結果により岡山県より52kg級牧野、60kg級村木の2名が世界選手権に派遣され、共に8位に入賞した。また、村木はこの年のアジア競技大会にも参加し、60kg級5位に入賞している。この年より高校生が低迷しはじめる。県内の高校の競技会においても参加人数が減少し、100kg以上を試技する選手が少なくなる。強化の一環として、藤沢雄平氏を通じ倉敷市に練習場の提供を要請、倉敷陸上競技場内に練習場を確保することができた。県協会練習場の誕生である。後、全日本社会人選手権において活躍する倉敷クラブは、その練習場仲間が結成したチームである。

昭和58年6月の全日本選手権大会60kg級において村木優勝、翌年のオリンピック出場が濃厚になった。牧野についてもオリンピック代表候補になる。この2選手は、名実共に日本を代表する選手になった。しかし、高校生は強化が遅れ、全国高校総体、国体入賞者ゼロであった。2選手の勢いを借り、他の一般の選手もよく頑張り、同年11月の全日本社会人大会で倉敷クラブが団体優勝し、内閣総理大臣杯を獲得した。

昭和59年8月、ロサンゼルス・オリンピックに村木が派遣された。協会全員が表彰台への期待を持ち送り出したが、惜しくも5位となり涙を飲む。

同年の国体は10月に奈良県で開催され、成年は充実した力を発揮したが、少年がかみ合わず団体入賞は逃した。

昭和60年代から現在まで

昭和60年、全日本選手権大会は兵庫県尼崎市で開催され、52kg級牧野、60kg級村木が各階級で優勝し、その年の世界選手権の代表に選考された。この年、久しぶりに高校選手権56kg級で平床が3位に入賞し、その他1名の入賞者を出した。

国体は鳥取県で開催され、やはり成年は気を吐いたが、少年で失格者が出、総合入賞を逃してしまった。

昭和61年、昭和62年は、徐々に高校生に実力がつき全国高校選手権でも入賞する者が出、立ち直りのきざしがうかがえるようになってきたが、国体の得点には結びつかなかった。62年の国体は成年の52kg級牧野、60kg級村木の活躍があり、成年だけでどうにか総合8位に入賞することができた。

また、昭和61年のアジア競技大会に村木が参加し60kg級においてみごと2位入賞を果たし、昭和62年には村木の翌年に控えたソウル・オリンピック出場が内定した。

昭和63年3月に愛知県で行われた全国高校選抜大会で56kg級宮宗が優勝し高校生としての全国大会優勝は7年ぶりの快挙となった。8月兵庫県であった全国高校選手権ではS競技で失格してしまい、無念の涙を飲んだ。また、この年より国体の得点方式が変更になり、選手の得点点が全て単別得点として加算されるようになった。10月に京都で行われた国体では、岡山県選手団は全員入賞を目標によく頑張りを達成し、総合でも5位に食い込む健闘を見せた。前後するが、この年、岩田は2回目のオリンピック出場を決め、ソウル・オリンピック60kg級に出場し、5位入賞を果たした。

翌64年は平成と年号が改まった。協会としても高校の強化に取り組む。

平成元年は高校生は52kg級池田がよく

頑張った。8月の全国高校選手権においてはS競技では兵庫県の納富選手に勝ち、1位となった。また、9月に北海道であった国体でもS競技で優勝した。また、成年60kg級に出場した村木は、J競技T共に日本新記録を樹立した。その記録は平成5年1月の新階級変更まで日本記録として残った。

平成2年は宮城県で開催された全国高校総体60kg級で同じ岡山県所属の鈴木、谷野が1位2位を分け、その快挙に協会として喝采を送った。優勝した鈴木を擁する倉敷商高は83kg級2位の藤沢らの活躍で団体5位入賞を果たした。10月に福岡県で開催された国体では久々の高校生の充実を見、団体上位進出を狙ったが、成年選手が棄権したため得点が伸びず5位に甘んじた。この年、村木を3回目の北京アジア大会に送り出した。

平成3年は静岡県での全国高校総体で91kg級河島が2位に入り、また+99kg級の石井が3位になった。一般選手が新旧交替の時期に入り石川県での国体では思うように得点が伸びず、さんざん結果に終わってしまった。16回連続出場という輝かしい実績を残した牧野選手もこの試合をもって国体から引退することを決意した。

平成4年3月、千葉県で開催された全国高校選抜大会で1年生ながら西村が90kg級2位に入賞し、8月に宮崎県で行われた全国高校総体では岡山県選手はよく頑張り4名の入賞者を出した。その中でも100kg級に出場した西村は大器の片鱗をうかがわせた。この夏村木はバルセロナ・オリンピックに出場した。3回目の代表であったが、前年の故障がまだ癒えぬため入賞は逃した。

村木もまた、このオリンピックを最後に国際大会からの引退を決意し、アジア大会3回、オリンピック3回、世界選手権5回に出場し、日本の代表、また郷土岡山の代表として数々の栄誉ある実績を残した。

この年協会として長年の悲願であった競技場建設が実現するはこびとなった。協会の田中会長の再三にわたる働きかけがあつての実現であった。特に

藤井副会長は実務面を担当し、建設が決定されてからは何度も倉敷市体育課を訪ね細部にわたり打ち合わせを行い、若手協会関係者が行動しやすいように橋渡しをした。

平成5年は1月1日よりIWFの大幅なルール改正が行われ、階級が全く変更された。全国高校選抜県予選等で多少の問題が起こったがスムーズに変更された。また、この年は西村が高校全国大会3冠をめざした。

3月の全国高校選抜では難なく優勝、8月の全国高校総体では腰痛のため危ぶまれたが終わってみれば余裕の勝利、10月の国体では日本高校新記録の樹立まで行い、3冠を達成した。

この年の5月に倉敷市が総額2億円をかけて建設にとりかかっていた倉敷運動公園ウエイトリフティング場が完成し、その記念事業として全国女子選手権大会の誘致が決定し、日本協会の指導により、石井理事長の号令のもと岡山県協会が一丸となってその運営にあたった。大きな問題もなく無事終了することができ、岡山県協会にとって、大会運営への自信となった。

平成6年、7年は競技の面では新旧交替の時期に入りやや低迷の感があるが、西村はじめ若手選手の今後の成長に期待する。しかし、平成6年は協会として大変なミスを行った年である。

6月に実施した中国高校選手権大会において、島根県の今岡が日本高校新記録を樹立しながら、競技役員の不備から非公認となり、翌年3月の全国選抜大会の監督会議の席上、全国高体連委員長から中国地区の関係者に対し厳重な注意があった。そのことについては岡山県協会としては真摯に受け止め、協会60年史上でこのようなミスを記録に残すことによって、来る平成17年岡山国体への教訓として生かしていきたいと思う。

〈現役員〉

名誉会長	板谷 誠一
会 長	田中 博文
副会長	藤井 卓一 小野 貢
理事長	石井重四郎
総 務	長谷 章一